
伯爵令嬢シナモン 第1部 「飛行船の殺人」

狼皮のスーツマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伯爵令嬢シナモン 第1部 「飛行船の殺人」

【Nコード】

N5678J

【作者名】

狼皮のスイーツマン

【あらすじ】

豪華飛行船ミステリー。アールヌーボー様式で内装されたツェツペリン型巨大飛行客船シルフィー。そこで起きた殺人事件の捜査は18歳の女性考古学者レディー・シナモンに託された。

時は1920年代の終わり、可憐でお茶目なレディー・シナモンは18歳の誕生日に父君から飛行船シルフィーの搭乗券を贈られます。飛行船シルフィーはアールヌーボー様式を採用した天空の美術館のようでシナモンはご機嫌です。ところが、その飛行船シルフィーで殺人事件が起こってしまいました。船長は頭脳明晰なシナモン

ンに捜査を依頼します。

「雑誌『東京倶楽部』の非重要なお知らせ」VOL・1（前書き）

おや、この蘭は、「読者への警告」と書いてありますね。常識とは、みんなが知っているもの。あえて書くまでもないでしょう。

「雑誌『東京倶楽部』の非重要なお知らせ」VOL.1

雑誌『東京倶楽部』の非重要なお知らせ1

豪華飛行船ミステリー。アールヌーボー様式で内装されたツエツペリン型巨大飛行客船シルフィー。そこで起きた殺人事件の捜査は18歳の女性考古学者レディー・シナモンに託された。

ここは東京に本社がある雑誌『東京倶楽部』の編集室です。編集長の机の手前には記者やカメラマンの机が並べてあり、並んで座っているのが、記者の佐藤氏とカメラマンの中居氏でありました。ちょうど昼休みで、二人はコンビニで買ってきたカップラーメンをすすりながらノートパソコンのキーボードをたたいているところです。

「おいつ、中居、何やってんだ？」

「『伯爵令嬢シナモン 飛行船の殺人』の 宣伝文句っすよ」

「なっ、なっ、中居っ！」

「おっ、お気に召しませんか？」

「いや、上等だ」

……。ならばはじめからそういえば……。先輩は姫様が関わると人が変わるんだからまいっちゃうよ。

「何かいったか？」

「いわないっすよ」

中居氏は、はっ、と気がついたように話題をかえました。

「ところで、読者の皆さん、俺たちのこと知っているんすかね、先輩？」

「そつだ、俺たちの自己紹介してなかったぞ」

佐藤氏と中居氏は、起立すると、パソコン画面に向かって名刺を差し出しました。

「私どもは、雑誌『東京倶楽部』の佐藤と中居です。ブログに掲載されました『伯爵令嬢シナモン 飛行船の殺人』の登場人物にもなっております。これから私どもは、当ブログの営業をさせていただきますのでよろしくお願いいたします」

..... 一同礼。

著者、狼皮のスイーツマンからのご挨拶

初めまして皆様。

当該作品は、ブログ人、FC2、ニコツとタウンで発表いたしました。このたび、『小説家になろう』サイトでも発表いたしますので宜しくお願いいたします。量も増えてまいりました。まとめて転載するのも難儀ですので、時間をみて少しずつ転載していきたいと考えております。

一気によみたい方は、横文字になりますが、下記URLが便利ですのでご利用くださいませ。

それでは、宜しくご愛顧のほどを。

伯爵令嬢シナモン『飛行船の殺人』

<http://r24eaonh.blogspot5.fc2.com/>

よつこそ、伯爵令嬢シナモンの世界へ

私が描いている自作小説、『伯爵令嬢シナモン』は、ネット上では、「ブログ人」「FC2」「ニコツとタウン」へと発表の場を広げ、オプシヨン・シーンを加えたニコツと版も第2部までおわりました。いよいよ第3部にはいります。そこで、第3部から読まれる方もいらっしやるでしょうからここで整理の必要があります。以下に、第1部と第2部のあらすじ、世界観、登場人物を、まとめてみましょう。作品ジャンルはミステリーです。

あらすじと世界観

第1部 「飛行船の殺人」

第1次世界大戦が終結してから、しばらく経った1920年代末の物語です。ドイツ第二帝国が建造したツツペリン型爆撃用飛行船L77が、ドイツの敗戦によってイギリスに戦利品として渡り、それが、上海在住のユダヤ大富豪の手に渡り、アールヌーボー様式を採用した豪華飛行船シルフィーとして大改装が行われます。飛行船ルートは上海 - 東京間。

聡明で優美なレディー・シナモンは、父君であるリザード伯爵から、十八歳の誕生日の記念にと、飛行船搭乗券を贈られます。

そんな楽しい飛行船旅行のなかで、とある人物が殺害されました。船長は、シナモンが過去にいくつかの事件を解決したことを知っており、フライト中における捜査の全権を彼女に委ねます。

意外な事件の真相の裏側には、大いなる歴史のうねりが隠されています。

第2部 「コンウォールの才媛」

第1部 「飛行船の殺人」に遡る5年前、13歳のレディー・シナモンをして「コンウォールの才媛」異名をなさしめ、考古学界と探偵デビューを同時に飾った、奇跡の物語です。

ロンドンの修道院で学んでいたシナモンが故郷コンウォールに帰省し、夏休みの自由課題レポートで、発掘調査を行っていたところ、協力スタッフの一員である少年が、測量用の機材望遠鏡で偶然に殺人の瞬間を目撃してしまいました。被害者は、なんとシナモンの親族でした。被害者は大資産家であり、その人物の遺言により、シナモンが相続人に指名されたことで、暗殺者から生命を狙われることに……そして起きる第二の殺人……。

そんななか、シナモンは、連続殺人に怯える住民を励ますため、自らの危険をかえりみず、中世騎士物語「トリスタンとイゾルテ」の舞台に立ち、主役の騎士トリスタンを演じます。サスペンス調のスリリングな展開と、重厚な舞台劇が同時進行します。

事件の裏側にあるもう一つの物語、（実在の人物である）アラビアのロレンスト、ヨーロッパー危険な男スコルツエニーの対決、もお見逃しなく。

人名・地名・用語索引（前書き）

第1部・第2部の人物名・地名・用語について索引を設けます。
読まれる方の道標となれば幸いです。

人名・地名・用語索引

ア行

アーネスト・サトウ …… 幕末・明治にかけて活躍したイギリス外交官・考古学者。勲^サ爵士の称号をもつ実在の人物。親日家としても有名である。幼い日のシナモンに絶大な影響を与えた人物である。

オットー・スコルツェニー …… 第二次世界大戦におけるナチス・ドイツの英雄で、特殊部隊を率いた数々の奇抜な作戦により、連合国を大混乱に陥れるれる実在の人物。「ヨーロッパ危険な男」の異名をもつ。『伯爵令嬢シナモン』シリーズではあらゆる事件の黒幕となっている。

エドガー博士 …… 飛行船シルフィーの乗船客。元大英博物館学芸員にしてロンドン大学教授。考古学者。（第1部）

アームストロング夫人 …… 飛行船シルフィー乗船客。アメリカのお喋りな有閑マダムである。（第1部）

ウルフレザー家宰 …… スイーツマン・ウルフレザー。リザード伯爵家に仕える老執事長。（第1・2部オプシオン）

イゾルテ …… 騎士物語『トリスタンとイゾルテ』のヒロイン。
アイルランド王女にしてマルク王妃。（第2部劇中劇）

エリー …… 殺害されたジョージ・セシルの若き妻。

エディック …… 殺害されたジョージ・セシルの従弟の一人。(第2部)

カ行

かもめ岬 …… レディー・シナモンの故郷リザードにある大西洋を望んだ絶景スポット。遺跡の宝庫である。

川島芳子 …… 清朝肅親王家王女で、のちに日本人の養女となった。中国で歌手となる。諜報活動をしていたといわれ第二次世界大戦直後に中国国民党により銃殺処刑された。和歌にも通じた才媛である。(第2部オプシオン)

カール・ハウスホーファー …… ドイツ退役中将、ミュンヘン大学教授、地政学者。彼の唱える『生存権の理論』は、ナチスドイツ政策の理論的根拠となり、日本の軍国主義化にも拍車をかけた。大の親日家でもあり、戦後、「武士道」にならって割腹自殺を遂げる。実在の人物である。(第1・2部オプシオン)

紅舜連^{こうしゅんれん} …… 飛行船シルフィー乗船客。上海の名女優を妹とする美女である。(第1部)

コンウォール …… イギリス南西端にある半島名、あるいは州名であり、シナモンの故郷リザード市はその最西端に位置している。コンウォール州ではカソリックを信仰するケルト系住民が多く住む。アーサー王伝説の有力な候補地であり、また、中世騎士物語『トリスタンとイゾルテ』の舞台ともなっている。

サ行

シナモン …… 本編のヒロイン。ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブリザードがフルネーム。伯爵領リザードを治めるセシル家の跡を継ぐことになる令嬢。優美にして聡明であり、「コンウォールの才媛」の異名をもつ。17歳にしてオクスフォード大学を卒業した考古学者。

シルフィー …… ギリシャ神話に由来する「風の妖精」の意味である。豪華客船に改装したツエツペリン型爆撃用飛行船L77の名称でもある。（第1部）

スコルツエニー オットースコルツエニー

ジョン少年 …… リザード城庭師の孫。第1の殺人の目撃者となる。シナモンの発掘調査ではよき協力者である。

佐藤 …… 雑誌『東京倶楽部』記者。後輩であるカメラマン中居とは迷コンビをなす。本編における専門用語の解説者である。インテリではあるが、シナモンのことになると豹変する性格である。

ストーン・サークル（環状列石） …… 世界中にある有史以前の巨石記念物の一種で、ヨーロッパでは青銅器時代、先住民であるケルト人が築いた。シナモンの故郷リザードでは、かもめ岬にあるシナモンはここでロレンスと出会った。

船長（飛行船シルフィー船長） …… シナモンの父親の戦友。
（愛1部）

ジョージ・セシル …… リザードの大農園主。実業家。シナモンの親族。「コンウォールの才媛」リザード連続殺人事件における第1の被害者。（第2部）

シュリーマン …… 交易商、哲学者、考古学者。一九世紀、トルコのトロヤ遺跡発掘で名をはせる。語学の天才で三週間で一か国語をマスターしている。現在でもその恐るべき語学学習法は引用される。シナモン優れたの語学能力もシュリーマンの学習方法に準じている。

タ行

トリスタン …… コンウォールを舞台にした騎士物語『トリスタンとイゾルテ』の主人公。シナモンがリザード祭りで主演する。(第2部劇中劇)
チャールズ …… 殺害されたジョージ・セシルの従弟の一人。(第2部)
灯台守の老人 …… 「コンウォールの才媛」リザード連続殺人事件における第2の被害者。(第2部)

ナ行

中居 …… 雑誌『東京倶楽部』カメラマンで、佐藤の後輩。佐藤とは迷コンビとなり、もっぱら、専門用語の訊き役となる。

ハ行

ハウスホーファー …… カール・ハウスホーファー

マ行

ミューラー …… 人当たりのいいスコルツェニーの相棒。架空の人物でナチスドイツの将領とは別人である。(第1部オプシヨン・第2部)

レザー警部 …… デボン・コンウォール警察所属。リザードにおける殺人事件の担当者。(第2部)

マンフレート・フォン・リヒトホーフエン …… 空軍大尉。プロイセン・ドイツの撃墜王。男爵家に生まれたこと、自らが撃墜した相手に花をたむける行為が空飛ぶ騎士のようで、「レッド・バロン」と呼ばれ賞賛された実在の人物。第一次世界大戦 血の4月 と呼ばれる戦闘に参加し大戦果をあげる。この戦闘でイギリスに壊滅的な打撃を被った。シナモンの父親リザード伯爵と飛行船シルフィーの船長は戦友で、伯爵がリヒトホーフから船長を助けたこともあり、飛行船ではシナモンをVIP待遇にしている。

ヤ・ラ・ワ行

ロレンス …… トーマス・エドワード・ロレンス。「アラビアのロレンス」の異名がある。メッカ太守ファイサル王子を戴いて戦術オブザーバーとなり、トルコ帝国をゲリラ戦で攪乱し、同帝国を釘付けにしてヨーロッパ侵略を妨げたことにより、イギリスの第一次世界大戦勝利に貢献した実在の英雄である。もともとはオクスフォード大学卒の考古学者であった。著書『智恵の七柱』は後世のゲリラ戦術のバイブルとなった。物語では、シナモンがもつとも憧憬を抱く人物である。

夢野久作 ゆめのくまひさく

…… 富豪にして作家。20年近くの歳月をかけて執

筆し自費出版したカルトな作風の小説『髑髏杯』どくろまがしきは有名である。上海に滞在したこともある実在の人物である。物語では、飛行船シルフィーの乗船客として登場。(第1部)

劉真栄りゅうしんえい …… 中国杭州一帯を支配下に置く軍閥の首領。粗暴な

振る舞い、 将軍様 と呼ばれている。架空の人物である。

溶融保壘ようじゆうほらい …… ローマ軍の侵略により、戦禍などの火災により溶けた先住民ケルト族の砦跡でスコットランドに多い。(第2部)

リザード …… コンウォール州リザード市。イングランド島南西端に長く突き出たコンウォール半島の先端にある大西洋を望んだ町。同名のリザード城と城下町とがある。実在の地名ではあるが、本編では架空の町として描いている。

マルク王 …… 中世騎士物語『トリスタンとイゾルテ』に登場する

コンウォールの名君。トリスタンの伯父にしてイゾルテの夫。(第2部劇中劇)

モーガン …… 「コンウォールの才媛」で、友人ジョージ・セシルの妻エリーと不倫の仲と噂される。

人名・地名・用語索引（後書き）

以上が『伯爵令嬢シナモン』第1部・第2部の人物名・地名・用語の索引です。お読みになる際、お役に立てば幸いです。それでは、本編をお楽しみくださいませ。

序章

リザード市は、イングランド島西端コンウォール半島に位置している。そこには大西洋を臨んだ岬にゴシック風の城館リザード城がある。麓の市街地から城館にたどり着くには少し坂道を登らなければならぬ。

坂道を、自転車を押した郵便配達員が行き、やがて頂きにたどりついた。頂は城壁に囲まれており、内部にはいるには、北門か南門のいずれかを通らねばならない。郵便配達員が、峻厳な北門をくぐると、意表をつくかのように華やかな薔薇園となり、そこを左に曲がったところにある北館へと歩いて行った。

リザード城の郭は、薔薇園を中心に、西にたたずむ本館と、北門・南門に隣接した南北の別館が存在する。郵便配達員が、北館にある執務室の扉をノックすると、燕尾服を着た初老の人物が現れた。

「ご機嫌よう家宰さん、お手紙ですよ」

郵便配達員はそういって封書を初老の男に手渡すと、自転車に乗って、もときた坂道をくだっていった。初老の男は受け取った封書の宛名と差出人を指でなぞって読んでみた。

……姫様宛だ。ほお、シルフィー航空株式会社か……。

そう呟くと、家宰は杖をついて本館へと向かった。

扉を開けた途端、甘い紅茶の香りが漂ってくる。部屋は、おびただしい蔵書を収めた広間となっており、テーブルの上には、古代の壺、大理石の彫刻、青銅剣、それに開かれた数冊のノートが置かれていた。そこがその人の研究室となっている。研究室のもっとも奥には大きな事務机があり、手前にはソファとテーブルの応接セット

がある。

「飛行船のチケットですね。いま紅茶をいれたところです。どうぞおかけください」

古風なドレスに身を包み黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人が、銀ポットから、二つのティーカップに琥珀色の液体を注いでいる。

「――私はリザード伯爵セシル家の家宰スイーツマン・ウルフレザー。リザード伯爵家は、チューダー朝から続く古い家柄でしてな、他家とは少しばかり違ういい回しをすることもありますが、そのところはご容赦されたい。伯爵様を御屋形様、伯爵令嬢を姫様そして執事長のことを家宰と呼ぶのが習わし。当家には自慢の姫様がいらっしゃる。」

ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザード

十八歳。いずれはリザード伯爵家を継いで伯爵夫人となられる。職業は考古学者、あだ名はコンウォールの才媛。聡明で優雅、そしてお茶目なところもある方だ。

では、姫様の物語を始めるとしよう……。

第1章 ティーパーティー

第一次世界大戦と第二次世界大戦のはざまには、短くて危ういながらも平和な時代が確かに存在し、往事の世相を反映するかのようになり、東洋のパリと称されたモダン都市上海には、現地人の自治政府と外国人居留地が設けられ、世にも不思議な空間が形成されていた。

上海には大きく三つのエリアが存在する。一つめは、中国の自治政府がおかれた上海南部にある上海県城で、城壁に囲まれた清朝の香りのする旧市街だ。二つめと三つめは外国人居留地である。外国人居留地のことを租界というのだが、租界は上海中央部のフランス租界と、北部の共同租界とに分かれており、上海県城と二つの租界はそれぞれ個別に警察や軍隊まで保有していたのである。なんというアンバランスな町なのだろう。まるで、一つの町のなかに三つの国家があるようなものだ。

共同租界というのはイギリスとアメリカが管轄する地区で、共同租界の中心は長江の支流である黄浦江左岸に築かれた波止場にあつた。波止場はバンドと呼ばれ、ロンドンを思わせるような古風で重厚な建物が建ち並び、少し離れたところにはアールデコ風の摩天楼がそびえたちアジアの金融センターとなっていた。バンドは夜ともなればネオンが一斉に光り輝き壮麗な建築群を飾り立てていたものだ。

バンドをはさんだ北と南には住宅街があり、白い壁に山吹色の屋根が映えるヴェランダハウスともイギリス植民地様式ともよばれる邸宅が軒を連ねていた。ヴェランダハウスは、モンスーン期の雨や七月の強すぎる陽光から建物を保護し、居住者が快適に過ごせるように工夫されており、高級官僚やビジネスマンはそこに居住してい

た。

モンストーンにはまだ間のある初夏の午後四時、薔薇やハーブの草花で飾られたヴェランダハウスの庭園広場である。広場の芝生の上には丸くて大きな白いテーブル一つと、そろいの椅子が五つおかれていた。中国娘のメイドが、卓上に銀製のケーキケースとポットを運んできた。メイドがウエッジウッドのティーカップを並べだしたころ、あでやかに装った中高年の婦人たちが席につきだした。

夫は高級官僚や大会社役員で、家事はメイドがしてくれる。子供たちはもう大きくなって独立し、彼女たちにとって唯一の日課といえば気の合う仲間たちの間で催されるティーパーティーのみ。典型的な有閑夫人である。当時の中高年といえばビクトリア朝時代の氣質をもった人々で、「男女平等」をうたう若い世代とは反りが合わないようだった。しかしながら、その娘だけは例外であった。

「はじめまして、お茶会に同席させていただいて光栄です。私は、ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザードといえます。シナモンとだけおよびになられてもさしつかえありません」

スカートの両端を軽くつまんで一礼した娘はまだ十八そこらであったのだけれども、今まで見たこともない優雅な身のこなしに有閑夫人たちが好感と敬意の眼差しをおくった。

ザ・ライト・オノラブル……貴族の称号ね。レディー・シナモン……ほお、伯爵令嬢。セシル・オブ・リザード……リザード領主セシル家の一族。セシル家からは海軍大臣もでている。いずれにせよお姫様だわ、なんて上品なの！

当時の貴族たちは謙遜のために称号を隠したりはせず、一般市民もまた貴族たちが称号を隠したりするのを嫌う風潮があった。身分については、すべてをさらけだすのがエチケツトだったのだ。

ヴェランダハウスの奥方が誇らしげに、

「姪ですわ。大学で考古学を学びましてね。論文の取材でアジアの遺跡巡りをしておりますのよ」

とお仲間に紹介した。

「大学で考古学？ 論文？ さしずめ卒業論文の取材ね」

「いいえ、卒業していません。論文は学界に発表するものですわ」

「何回も飛び級なさったのね、レディー・シナモン？」

有閑夫人たちが目をまるくすると、叔母君がまたしても誇らしげに口をはさんだ。

「夫からききますには、学界では、？ コンウォールの才媛？ と呼ばれているそうですのよ」

叔母君が扇子で口を隠して笑うと、シナモンも少し困った顔をしながら笑った。コンウォールとはイギリス南西部地方でシナモンの故郷だ。

さて、当時のイギリス上流階級では中国茶が珍重されたものだった。ヴェランダハウスのメイドがポットから注いだのは福建省祁門の薫製茶で、キーマンともキームンともよばれる香ばしくも爽やかなフレーバーティーだった。

「おいしい！」

湯気に香ばしさが漂う琥珀色の液体で満たされた金縁のティーカップを手にした若い貴婦人が屈託のない笑顔をみせた。シナモンは水色のやや古風なドレス姿で、黄金の長い髪を後ろに結っている。

栗色の瞳は優しくで気取ったところがない。けれども良家の令嬢らしく、有閑夫人たちがゴシップ話をしだすと、笑みを浮かべたまま

口をつぐんでしまふ。

口をつぐんだ姪を後目に叔母君は、

このこに会ったのは七年ぶりだけれど、子羊を追いかけて野山をかけるおてんばさんだったわ。いまではこんな素敵なお姫様になって、時の経つのは早いものねえ。

と思うのだった。

シナモンは他人のプライバシーについてあれやこれや口にしないのだけれども、有閑夫人たちを楽しませる特技をもっていた。

「みなさんのカップをおみせください。占ってさしあげましょう」

「紅茶占いね？ 素敵な余興だわ」

シナモンは有閑夫人の一人のカップを神妙な顔をしてのぞきこんだ。

「紅茶の葉が馬の形をしています。次の日曜日あたりにご主人から、『競馬に行こう』と誘われていらっしやなくて？」

「やだあ、大当たり！」

叔母君がまた口をはさんだ。

「姪の占いは子供のころから不思議なくらいによく当たりましたのよ。おほほほほ……」

シナモンは、三人の有閑夫人と叔母のカップをそんなふう已全部みてやった。残るはその人自身のカップだ。全員がシナモンのカップに注目した。カップの底には紅茶の葉が一枚だけ残っており、まるで葉巻煙草のような形になっている。

「これはどういう意味？」

有閑夫人たちは興味津々だ。

シナモンはまじめな顔をすると急に立ち上がり、腰をかがめ、片

方の耳に手をあてがってから、残りの手の人差し指を唇によせた。瞳はとじている。

「しいつ、お静かに。？シルフィー？に相談しておりますの！」

まあ、なんてキュートなジョークなの！

シルフィーは風の妖精のことをいう。有閑夫人たちは、愛らしくて品のいい冗談を放つシナモンにすっかり魅了されたようだ。シナモンはまだ目をとじている。

「くる、くる、私のすぐうしろ、そのこの名前が？シルフィー?!」

かすかなプロペラ音がする。有閑夫人たちが見上げた若い貴婦人の背後には、薄暮に浮かぶ銀色の巨大飛行船があった。

第2章 豪華飛行船シルフィー

かもめ岬の姫君へ

十八歳の誕生日おめでとう。殷墟を見学に行ったそうだね。どうでしたか？ たぶん素晴らしい遺跡だったと思います。このあいだの手紙では、父君から誕生祝いに飛行船の乗船チケットを贈られたのだとか、乗り物好きの私としては羨ましい限りです。どうか楽しい旅を。

私は最近また飛行機を操縦しました。風に乗るのは素敵だ。君にも乗ってもらいたいな。

T・E・ロレンス

山吹色の屋根をしたヴェランダハウスから道路に出たリムージンのクラクションが鳴った。

「シナモン、準備できた？」

「はいっ、叔母様」

ヴェランダの藤椅子にもたれて手紙を読んでいたレディー・シナモンが、ハンドバックに手紙をしまい込み、中国娘のメイドに手伝ってもらって、トランクを車に積み込んだ。

上海の街路は急に幅が広くなったり狭くなったりする。このでたらめな規格の道路を縫って路面電車が窮屈そうに走り抜けていく。路面電車を追い越していくリムージンには、シナモンと叔母君、さらには見送りに行くといって乗り込んできた近所の有閑夫人たちの姿があった。リムージンを運転しているのは叔母君だ。シナモンは

名残惜しそうに車窓から街並みを眺めていた。

黄浦江左岸の船着き場をバンドという。バンドは上海の金融街であった。サッスーンハウス（現在の和平飯店）、上海海館などの石造建築物群が建ち並ぶ。石造建築物群にはネオバロック様式、ネオルネッサンス様式、アン女王復古様式などがあり、英領植民地に多く建造されたものだ。

人や車で麻痺した街路を警官達がてきばきと誘導する。警官達は中国人のほかに、インド人、ベトナム人、ロシア人といった外国人もいた。インド人はイギリス人が、ベトナム人はフランス人が植民地から呼び寄せ雇った。ロシア人はロシア革命で亡命してきた没落貴族だった。

上海の空気は淡いセピア色で、市街地の南を流れる黄浦江は、セピア色をもっと濃くした土色をしている。黄浦江を誰も大河だとはいわない。けれども、大型船が何十隻も停泊できるほどの川幅と水深を有している。米英列強は、租界にいつ襲いかかってくるか判らない中国政府軍や反乱軍に備えて、何隻かの巡洋艦を黄浦江の真ん中にたえず停泊させていた。そんな黄浦江に沿った道路を走るリムジンが、バンドの波止場に着こうとしていたが、リムジンに乗った有閑夫人たちのゴシップはまだ続いている。

天気は小雨模様である。にもかかわらず、バンドに押し寄せた数万人の観衆が、対岸にある浦東地区を眺望していた。浦東地区は二十世紀現在でこそ新都心であるが、当時はただの田園地帯に過ぎなかった。ゆえに飛行船専用飛行場が仮設されたのである。農地を潰して平坦面をつくり、簡単な管制塔や倉庫、さらに飛行船の船体をロープで繋ぐ繫留塔が建てられた。豪華巨大飛行船シルフィ―はそこで宙に舞う時を待っていた。

一般見物人はもとより、ラジオや新聞、雑誌といった各国報道機関関係者も多数押し寄せた。雑誌？東京倶楽部？の記者佐藤とカメラマンの中居もその中にいた。佐藤は、すぐ横にいた上海在住の日本人紳士に取材した。いかにも成金といった感じのするビールっ腹をした口髭の男だ。

「社長さん、巨大飛行船を間近に見られた感想をお聞かせ下さい」「いやあ、そこにある巡洋艦より大きい飛行船が空に浮かぶなんて信じられんだろう。じゃから、わしはこの目で確かめなくては気がすまんだ」

紳士は、黄浦江の中程に投錨している英国巡洋艦を指さした。

カメラマンの中居が、

「それでは社長、一枚撮らせてください」と頼むと、紳士は傍らの高級娼婦をぐいっとたぐりよせた。高級娼婦は亡命ロシア人だった。グラマーな美人である。

二人は波止場から渡しの小型汽船に乗り込み対岸に渡った。汽船の上では欄干にもたれて中居がぼやいている。

「いいなあ、あのオヤジ。おいしすぎますよね、先輩」
後輩である中居をなだめるかのように佐藤がいった。

「あのオヤジにいわせりゃ、俺たちのほうがよっぽどおいしく思うだろうよ。取材とはいえ、俺達は飛行船シルフィーに乗れるんだ。考えてもみるよ、俺達の乗船券は千六百ポンドだ。あのロールスロイスやベランダハウスが買ってしまうんだぜ」

「そつ、そつっすよね」

そつは答えたものの、中居のもやもやはまだ晴れない。

佐藤・中居コンビを乗せた連絡船には一台のリムジンが乗って

いた。リムジンの横にはレディー・シナモンと見送りの一行がおり、二人の目線はシナモンに釘付けになった。

「なんて綺麗な人なんだ」

「同感です」

「飛行船に乗るのかな？」

巨大飛行船上海に舞う。

悪くない題名だ。飛行船のタラップを昇る麗人の写真は、絵になる、物語になる。翌週には、佐藤と中居の特集記事を載せた雑誌？東京倶楽部？が日本全国の書店店頭を飾るのだ。

巨大飛行船シルフィーは葉巻形をした銀色の船体で、先端部にはツタ意匠のS字文様が、尾翼にはT字文に蛇をからませたヘルメス紋が入っていた。施設の大半は船体下部にあった。プロペラは四基で、操舵室や客室などのゴンドラも下部にあった。昇降口も同じで胴体から逆八の字に開くように設計されていた。そこを乗客たちが昇っていく。シナモンも乗客の列にいた。

二人は最上の？絵？を撮るため、タラップの下に陣取って、レディー・シナモンを待ち受けた。不意にフラッシュがたかれたので、シナモンがちょっと驚いた顔をした。さらに追い討ちをかけるように、

「贅沢はいわないわ、シナモン。日本のお土産は、真珠のネックレスでも？ノリタケ？の茶器セットでもよくなってよ」

と叔母が叫んだ。

三人の有閑夫人は忠告した。

「可哀相に、顔を真っ赤にしているわ。そのジョークは頂けなかつたかも」

「あら、彼女の実家はとても裕福なのよ。これくらいは
「そういう問題じゃなく、はしたないっていうこと！」

ちょっと舌を出した叔母を後目にシナモンは手を振って船内に消えた。船内からは入れ違いに船長が、タラップの途中まで降りてきて取材の二人に声をかけた。

「お客様がたが最後です。出航いたしますのでお早めにご乗船ください」

「はいはい」

佐藤たち二人が駆け昇るとほどなく、逆八の字をしたタラップが閉じた。

タラップを昇っていくシナモンは、長方形をしたデッキが二層構造になっていることに気づいた。上部デッキと下部デッキとがあり、乗客キャビンは上部デッキにある。黄金の髪を後ろに結った麗人が、悪寒を観じて振り向くと、軍服姿の尊大な男が、通訳を通じて話しかけてきた。

「いくらだ？」

「？」

シナモンが目を丸くしていると、通訳は小声でいった。

「？将軍様？があなたをご愛妾に望んでおられる」

シナモンの平手が飛んだ。通訳は泣きっ面で、

「だから、私じゃなくて？将軍様？が……」
と訴えた。

シナモンは、？将軍様？を、きつ、とにらんだ。？将軍様？一行は、本人と通訳ら随員三人を加えた都合四人だ。上部デッキにいて一部始終を見ていたカメラマンの中居が、今にも？将軍様？一行に躍りかかろうとするのを佐藤が止めた。

「よせつ！」
「なぜです？」

佐藤がさした方向には、取り巻く人々の中から老紳士が飛び出してきて、シナモンをかばうように割って入ってきた。？將軍様のボディガードが老紳士に殴りかかると、ボディガードの拳を左肘で払い、代わりに自らの右拳をそいつの鼻先で止めた。たまらずそいつは、床に尻餅をつくはめになったのである。紳士が吐き捨てるようにいった。

「くさいつ。君たちの？將軍様？は酒に酔っている。とてもレディーに対する物言いではない。謝るべきだ」

中居が、

「ちえつ、俺の出番をとつちまったよ。あの爺さんがいなけりや、今頃は、あの別嬪さんからチューしてもらえたかもしれないのに……」

とふてくされると、佐藤が、

「馬鹿か、あの老紳士は、おまえと格が違う。おそらく退役軍人だな。しかも相当の修羅場をくぐり抜けてきた勇者とみた。それより、中居、なんで写真を撮らなかつたんだ」

と真顔でいった。中居は頭を掻いた。

殴り合いこそは止んだが、デツキはまだ険悪な雰囲気のままになっている。そこに先ほどの船長が現れた。船長は、初老の顎髭を生やした巨体の人であった。

「姫、お美しくなられた。父上は息災ですか？」

「ええ、元気ですわ。お久しぶりです、大佐！」

シナモンが手を差し出すと、大佐はうやうやしくその手をとった。船長の登場でいがみあっていた？將軍様？一行と老紳士は毒気を抜

かれたようである。？将軍様？は、メタボリックな腹を抱えて笑いながら、自室に消えていった。

シナモンが、老紳士に、

「助けて頂き感謝いたします」

というと、船長が、

「私からも礼をいわせてください。姫君の父上は私の恩人なのです」と言葉を続けた。

シナモンの父親と船長は第一次世界大戦のとき、同じ航空隊に所属する戦友だった。

老紳士は衣服を正して、

「紳士としての義務を果たしたまでです。礼には及びません」と答えた。

佐藤はふと、少し離れたところにいる野次馬の中の東洋人の男女に目がいった。男はサングラスをかけ、女はチャイナドレス姿であった。二人とも痩せている。

「騎士道か」

「東洋にはない発想ね」

佐藤の横にいた中居は、

「一件落着いたところで先輩、部屋に行きましょうよ。下部デッキにはバーがあるんですよ。のみにいきましょーうや」

そういつて佐藤の裾を引っ張ったのである。

黄金の髪をした貴婦人に、船長、老紳士、東洋人の二人連れ、そして？将軍様？……。役者は出そろった。舞台は、豪華巨大飛行船シルフィー。さあ、物語が動いてきたぞ。

佐藤は、手帖を胸ポケットから取り出すと、中居を追い越して客室へ向かった。意表をつかれた中居の耳に、船内アナウンスがきこえてきた。

皆様がご乗船になられている飛行船シルフィーは、上海 東京間二千キロメートルを、時速七十キロで航行し、目的地東京には三十時間後に到着する予定です。ご用むきの件はお近くのスチュワートにおたずねください。なお、本船の全長は二百四十メートル、幅は四十一メートル、水素ガス容量は二十万立方メートルとなっております。それでは皆様、快適な空の旅を。

シルフィーをつなぎ止めていたロープが斧で断ち切られた瞬間、観衆がどよめいた。銀色の巨体は静かに天空に舞い上がっていく。

第3章 ミュシヤの回廊

豪華巨大飛行船シルフィーのメインデッキは長方形で二層構造になっており、上部・下部に隔てられた二層のうち、上部デッキ中央部にあるのが乗客キャビンであった。乗客キャビンには、客室が二十五部屋あり、全室がシングルになっていた。

佐藤と中居が、ハンサムなスチュワートに案内された部屋は十号室と十一号室だった。荷物をそれぞれの部屋に運び終わるとスチュワートは、中居が使う十一号室に佐藤も呼んで部屋の説明をした。「ソファアは折り畳み式になっておりまして、夕食の間に乗務員がベッドに組み直させて頂きます。またルームサービスをご希望の場合は呼び鈴を鳴らしてください」

スチュワートはさらに細々とした案内をしてくれた。洗面台の蛇口には温水・冷水の両方があること、部屋にはバス・トイレユニットが設置されていることを教えてくれた。

中居がぴよんぴよん跳ねながら、スチュワートに訴えた。

「トイレに入っていていいかい、さつきから我慢していたんだ」

「トイレ使用につきましては、マニュアルがございますので、ご説明いたします」

「すつ、すまないけど、てて、手短に……」

「承知しました」

スチュワートは、独特な便座の操作方法を丁寧に実演してくれた。「まず、便座のふたを開けます。次に横に備えてある四角い紙パツクを開いて下に敷きます。そして用が済みましたら、便座のふたを閉めれば終了です」

佐藤が首をひねった。

「紙パックはどうなるんだ。水洗じゃないのかい？」

「紙パックはふたを閉めると空に投棄されます。飛行船の浮力の関係上、積載水量に限界がございましてトイレは、水洗ではなく紙パック投棄式が採用されました」

「ひどい。それじゃ地上の人間に直撃することだって……」

「ある程度の高度になりますと紙パックは、落下時に空中分解し、霧状となりますのでご心配なく」

スチユワートは感じよく佐藤に笑って答えた。両者の会話に割り込むように、ずっと待たされていた中居が、

「ししっ、失礼！」

と悲鳴をあげて、ユニットバス・トイレから二人を閉めだした。

プロムナードデッキは、乗客キャビンの両脇にあった。乗客キャビンから食堂のある左舷プロムナードデッキに向かう通路には赤い絨毯が敷かれ、壁や天井にはアールヌーボー様式の絵画や装飾が施されていた。アールヌーボーとは一九世紀末から二〇世紀初頭に流行した様式で、その展開は、美術界のみならず、建築や工芸といった分野にまで広がっている大芸術運動だった。アールヌーボー様式で統一された壁の随所には、東欧チエコの画家アルフォンソ・ミュシャのパネルが綺麗にはめ込まれており、ギリシャの女神がモチーフとなっていた。

ミュシャは、ポスターや装飾パネルの分野で活躍した画家で、近代グラフィックアートに革命をもたらした。東洋水彩画風のおさえ気味にした色調と様式のなかに、赤みを帯びたみずみずしい女性達を描いている。

アールヌーボーの代表的な画家には、他にクリムトがいるのだが、その人の画風は、金や赤・緑・紫といった極彩色を多用しているのだが、どこことなく死の影が漂い、ミュシャの画風とは対照的である。

黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人は、通路にはめ込まれたミュシャのパネルにすっかり魅了され、「素敵だわ！」と何度もつぶやいていた。

ミュシャの通路を右に折れて、プロムナードデッキに入ると食堂となり、食堂をさらに抜けると展望室となる。その窓の一部にはステンドグラスがはめ込まれているため、さしこむ光は複雑なものに変化するのだ。また展望室はベージュ色の壁や天井を基調としているのだが、随所に黒と金の意匠を加えてメリハリをつけていた。

シナモンが展望窓から下をのぞくと長江がみえた。大きな中洲である上海島、そこを東に向かうと巨大な河口デルタに突きあたり、河口デルタを抜けてしまえば東シナ海となる。このあたりは大河と海とが混ざり合うため、まるで水彩絵の具の褐色と青色を西と東でにじませたようになるのだ。

なんて美しいのでしょうか！

黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人が感嘆していると、後方の食堂のほうから声がした。

「計画を変更せねば」

「どうしてなの？」

若い男と女の声だ。少し間をおいてから男が、

「しつ、展望室に誰がいる」

と低くささやき、二人の靴音が足早に遠ざかっていった。不審に思ったシナモンが展望室の出入り口から食堂をのぞき込むと誰もいない。代わりに、ミュシャの通路から老紳士がやってきたので、シナモンは老紳士にたずねた。老紳士は乗船のときに、？将軍様？一行からシナモンを助けてくれた人物である。

「先ほどはどうもありがとうございました。ところでいまここで、男の人と女の人がお話ししていませんか？」

「いえ、みかけませんでしたよ」

老紳士は、頭に霜を戴いてはいるが、すらりと手足が伸びた体躯をしており、一見して往年の名優のようにもみえる。老紳士は孫娘に語りかけるようにシナモンを誘った。

「私は船内を散策しているところです。よろしければ一緒にいたしませんか？」

「ええ、喜んで。ところで先ほどは余裕がなくて、失礼ながらお名前をおうかがいしていませんでした。どうか教えていただきたいのですが…。私は、ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザードといえます。シナモンとだけおよびになられてもさしつかえありません」

老紳士の口髭は、手入れの行き届いた美しい銀色になっていた。その口髭が小刻みに揺れた。

「私はエドガー・ホワイト。ロンドン大学で考古学を教えています」

「エドガー博士？ あの有名な『ウルジグラッド』の？」

「おおつ、私の著書をご存じでしたか？」

ウルとは、中東に位置するイラク南部の古代都市遺跡のことで、

チギリス・ユーフラテス文明に属している。ジグラッドとは、彼
地において日乾し煉瓦を積み上げた高層神殿のことをいう。『旧約
聖書』にでてくる？バベルの塔？もジグラッドの一種だ。映画『ア
ラビアのロレンス』で有名な英雄T・E・ロレンスも、若かりしと
き大英博物館に所属する考古学者としてイラクの遺跡を調査してい
る。

物静かなシナモンとエドガー博士の語調が高揚した。

「……もちろん拝見いたしましたわ。こんなところでお会いできる
なんて光栄です、エドガー博士」

「シナモン？ 聞いたことがある。オクスフォード大学で何度も飛
び級して卒業したりザード伯爵のご令嬢、？コンウォールの才媛？、
あなたがそうでしたか！」

二人は、左舷プロムナードデッキから、もときたミュシャの通路
を戻って、乗客キャビンの端にあるT字路を横切り、反対にある右
舷プロムナードデッキに歩いていった。

「お嬢さん、私はこの飛行船が小宇宙のように思える。ともすれば
うるさくなるアールヌーボー様式をシックにおさえているところが
素晴らしい」

「同感ですわ。まるで美術館がお引越してきたかのようですも
の。静かでプロペラ・エンジンの振動さえ感じませんのね」

紳士は微笑んだ。

「飛行船は防振構造になっておりましてね、われわれはこの静寂を
楽しむことができるというわけです」

二人は右舷プロムナードデッキにあるラウンジに入った。

ラウンジには、黒く塗られたアールヌーボー様式のテーブルと椅
子が置かれてあり、雑誌『東京倶楽部』に所属する記者の佐藤とカ
メラマンの中居が相向いに座って珈琲を注文していた。

「おい中居、飛行船シルフィーのプロフィールを知っているか？」

「知りませんが、何かおもしろいネタなんですか？」

佐藤が白い歯をみせて笑った。

「こないだの大戦の主な戦勝国と敗戦国は？」

「ええつと、戦勝国はイギリス・アメリカ・フランスの連合国、それに敗戦国はドイツ・オーストリー・トルコの枢軸国でしたな。そんなことと、この飛行船とどう関係あるんすか？」

「大ありだ。第一次世界大戦のとき、飛行船はドイツで大量に生産されてロンドンを空襲した。戦争が終わると、戦勝国は敗戦国ドイツから、これら飛行船を戦利品として根こそぎぶんどっていったんだ。飛行船はツエッペリン型硬飛行船だった……」

スチュワートが珈琲を運んできた。かなり熱い。佐藤と中居は少し冷ますことにし、話を続けた。

「……イギリスは、ドイツからぶんどった飛行船をまねしてR三一八型っていうのをつくったんだが失敗作だった。R三一八型には、イギリスの威信を懸けて航空大臣が乗り込み、ドーバー海峡をこえフランスに渡るデモンストレーションを決行した。ところがだ、たどり着いたはいいが、R三一八型は、フランス上空で大爆発を起こし、イギリスは赤っ恥をかいたんだ。もともとツエッペリンは、あの有名な物理学者アインシュタインが設計したもので、凡人には手に負えない代物だったってわけだな」

「で、イギリスの飛行船は？」

「もちろん製造中止になった。ドイツからぶんどった飛行船も外国に売却したか解体した」

中居が目を大きく見開いた。

「てっことは、この飛行船？シルフィー？も？」

「そうだ、売りにだされた爆撃用飛行船の一つ、ツエッペリン型硬

飛行船七七。そいつを改装したものだ。？シルフィー？の所有者はオーストリー国籍のユダヤ人大富豪で、いま、上海に在住している」

珈琲が冷めたようだ。中居は容器から砂糖をスプーンですくい、珈琲カップに落とし、かき混ぜた。

「ユダヤの大富豪さん、なんで上海に住んでいるんですかねえ？」
「つまりは亡命だな。オーストリーは、いまドイツ同様にナチスが幅をきかせているだろ、当然、ユダヤ人にとって風当たりが強い。そこで大富豪さんは上海に引っ越したってわけだ」

佐藤が珈琲にミルクをなみなみと注ぐのをみていた中居があきれかえった。

「あーあつ、先輩。なんてことを。砂糖もミルクも入れすぎだあ…」

「やかましい。俺はこういうのが好きなんだよっ！」

「頑固だなあ、もう」

二人のいるラウンジに、若い貴婦人が老紳士にエスコートされて入ってきた。佐藤が中居に目配せすると、中居もウィンクして小声でできた。

「先輩、インタビュウやりますか？」

「もちろんだとも」

窓辺の席についたシナモンとエドガー博士がスチュワートの青年に紅茶を注文している。佐藤たちは二人の横に歩み寄った。

佐藤と中居がシナモンとエドガー博士の傍に立ち名刺をだした。

「飛行船シルフィーの取材をしております雑誌？東京倶楽部？の者です。私が記者の佐藤、そっちがカメラマンの中居です。お嬢さん、お話しと写真をとらせて頂いてよろしいですか？」

シナモンが少し戸惑った顔をしたが、すぐに笑顔になって名前を名乗った。そこから先は日本語で話した。

「……シナモンといいいます。シナモンとだけおよびになられてもさしつかえありません。ときにミスター佐藤にミスター中居、いま日本語を勉強しておりますの、あとで教えて戴けませんか？」

「よろこんで。それにしても素晴らしい日本語ですね、いつごろから勉強なさっていらっしやるのですか？」

「はい、先々週からです。日本に着くまでには覚えようと思います」「えっ？」

佐藤たち二人が顔を見合わせている間に、シナモンはエドガー博士に翻訳した。博士は微笑むシナモンと、戸惑う佐藤と中居を見比べて笑いだした。

「なるほど、？コンウォールの才媛？の異名は噂に違わない」

エドガー博士は日本語が話せない。だから英語で佐藤と中居にこんなことを話した。

「レディー・シナモンは三週間で外国語をマスターする。昔、トロヤ遺跡を調査したシュリーマンという考古学者がいたが、その人もそうだった。母国語に翻訳されたストーリーを理解してから、外国語テキストを暗記し、三週間で外国語をマスターしたのだそうだ。そうやってシュリーマンは何カ国もの外国語が話せるようになったんだ。レディー・シナモン、君はどうしているんだい？」

「はい、私の語学学習法も、シュリーマン先生の方法を参考にさせて戴いてますわ」

佐藤は呆気にとられた。

たしかに才媛だ！

あの別嬪さん、姫様は、何か圧倒するものをもっている。すっかり調子狂っちゃってるな、佐藤先輩。

中居は、シナモンとエドガー博士に断ってから、ラウンジを背景に、テーブルを挟んで藤椅子に座る二人の写真を撮った。

シナモンとエドガー博士が、飛行船シルフィー船内の散策を再開したので、佐藤と中居も便乗することにした。一行は、ラウンジからいったん通路を兼ねた右舷プロムナードデッキにでると、そこからさらに奥の図書室をのぞきこんだ。やはり黄色い壁や天井である。そこにS字紋の意匠を彫った黒い書棚が二つ並んでいた。書棚は五段あり、聖書、小説、雑誌が並んでいる。椅子や机も書棚と同じ黒で塗られ、植物的な曲線をモチーフにしたデザインとなっている。

シナモンたちはまた右舷プロムナードデッキに戻り、通路にでて乗客キャビンに至るT字路のところにある螺旋階段を降りていった。螺旋階段はそれこそツタがからまったようなデザインだ。佐藤がいった。

「本家本元のヨーロッパでは、アールヌーボー運動は第一次世界大戦でほぼ終わっているでしょ？　いまヨーロッパでは、画壇はシユールなどの前衛美術に、建築関係はアールデコ様式にとって代わられた。飛行船シルフィーのオーナーはなんでまた、いまさら、アールヌーボー様式で内装を施した飛行船を飛ばしているのですよね？」

中居が口をはさんだ。

「日本は、最新文化の伝播が遅い。竹久夢二とか、ふみやうしゅうじ落谷虹児といった挿し絵画家が、いまだにアールヌーボーをまねたイラストで儲け

ている。 田舎だよなあ」

佐藤の話しには、エドガー博士が答えた。

「宙に浮いた巨大なる墓標」

「墓標……ですか？」

「大富豪である？シルフィー？のオーナーは、ユダヤ人であるがために故郷を追われ、上海に亡命している。その人の友人の多くはオーストリー、ドイツ、ロシアなどの貴族が多かったときく……」

エドガー博士はかなり語調を落として話しを続けた。

「……第一次大戦の最中にそれらの国々は革命が起きて帝政は打倒された。貴族たちは処刑されたり、処刑されないまでも多くは没落している。大富豪は戦前の華やかなりし若いころをしのんでいる

あくまでも私の憶測だが……いや、楽しい旅にはそぐわない不吉な言葉だ。撤回しよう」

佐藤は、エドガー博士が一粒の涙を落としたのを見逃がさなかった。

（この老紳士にも、物語がありそうだな）

上部デッキから螺旋階段を降りたところが下部デッキだ。下部デッキには、一般乗客の立ち入りを禁止した乗務員専用エリアと、乗客用娯楽エリアが設けてある。乗務員専用エリアには厨房や乗務員シャワー室があり、乗客用娯楽エリアには喫煙室とバー、それに紳士・淑女用の手洗いがあった。

シナモンたちがバーをのぞくと気よさそうな中国人バーテンと黒人ピアノリストがあり、バーテンは丹念にグラスを磨き、ピアノリストはジュラルミン製ハーフピアノをまるで机の引き出しのように開いて鍵盤を調律していた。二人は一行をみかけると微笑んだ。

バーのなかにはカウンターと、テーブルが二つ、それに藤椅子が八つある。飛行船内の主な施設や通路がミュシャのパネルで揃えられているのに対して、バーには一枚だけクリムトの絵が飾られている。カンヴァスには、日本の金屏風を模した背景に極彩色の衣をまとった男女がからみあうかのように抱擁する「接吻」が描かれていた。「接吻」は豪華な絵ではあるのだけれども、背德的にさえみえるほどに官能的だ。

そのカウンターには、サングラスの日本人の男と、チャイナドレスの中国人の女が腰掛けていた。二人のグラスにたっぷり塩が塗ってあるところを見るとテキーラであろう。

シナモンは一瞬戸惑った。

エドガー博士が、

「どうなされたのですか？」

ときいたのだが、彼女は、

「いえ、なにも……」

と答えたのみだった。彼女の脳裏には先ほど、ひそみ声で、

「計画？という言葉をつかい姿を消した男女ではないか？」

という想いがしてならないのである。

カメラマンの中居が、くるっ、と回れ右をしてほかの三人に手招きした。

「おおっ、ここが喫煙室ですよ」

中居が扉を開けると煙草の煙がもうもうと押し寄せてきてむせかえった。

「わっ、目にしみる。換気扇が回っているだろうが……」

喫煙室には椅子が六つあり、そこに大柄なパイプ煙草をふかす大男が腰掛けている。中居が咳き込んでいると、大男が、「やあ」と手を振って戸口に立った。先ほど、エドガー博士と一緒にシナモンの窮地を救った船長である。

「やあ、シナモン姫、その人たちと親しくなったのかい？」

「はい」

「四時になったらスチュワートを迎えにやる。船長室に来てくれ、上等な？ラプサンスーチョン？が手に入ったんだ。ご馳走するよ。よかつたらお連れの皆さんもいかがかな？」

中居が、記者の佐藤にきいた。

「先輩、？ラプサンスーチョン？って何ですか？」

「薫製にした紅茶のことだ。めっちゃ高い」

「子供みたいにまた、砂糖とミルク入れすぎないでくださいよ」

「うるせえっ」

佐藤が中居の頭にげんこつをくれてやろうとしたが、中居は慣れたように素早く避けたので、げんこつは空を切った。船長は腹を抱えて笑いだしたので、シナモンとエドガー博士もつられて笑った。

四人はそれぞれ自分の部屋に戻った。その途中、佐藤がシナモンにきいた。

「シナモン姫、飛行船に喫煙室があるのはなぜかわかりますか？」

「飛行船？シルフィー？の浮力は大量の水素で得られています。水素に引火するのを防ぐための安全対策だと思えますが……」

「その通り。しかし喫煙室だろうとどこだろうと、飛行船船内で一端火災が起きれば、飛行船は火だるまになる。ある信頼できる筋からきいたここだけの話し、操縦室には非常用レバーがあつて、喫煙

で火災が起ると、操縦室の船員がレバーを、ぐいつ、と倒す。するとどうなると思います?」

佐藤が意味深に笑った。

「消化装置が作動するのですか?」

「いや、飛行船本体から喫煙室ごと切り離して落とすんです」

「ひどい、全面禁煙にすべきですわ」

「そっちのほうがよっぽどひどい。愛煙家は命よりも?至福のひとつとき?を選ぶものなのです。あのヘビースモーカーの船長だって知らないはずがないと思いますよ」

「それではあなたも愛煙家なのですね?」

「もちろん。部屋に行く前に、ちよつと一服してきます」

そついうと佐藤は喫煙室に戻って行った。

残る中居とエドガー博士は、例の?將軍様?一行にからまれないように、シナモンを部屋に送り届けてから自室に入った。

シナモンがシャワーを浴びて着替えたとき時計は四時近くになっていた。迎えに来たスチュワートの青年がノックしたので、ドアを開けると、通路にはほかの三人が待っていた。

船長は、黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人を飛行船内部に案内した。厨房を通り過ぎて船体後方に向かうと、薄暗がりの視界に、巨大な肋骨のような鋼鉄構造物が出現する。天井には網に収まった?気囊?《きのう》と呼ばれる大きな風船がいくつも立てに連なり、仕切り板で区切られていた。

「すごい! 鯨にのまれた?ピノキオ?が見た風景はこんな感じかしら」

シナモンは目を大きく見開いて見上げた。滅多には見られない光景である。前に進むには、人がどうにかすれ違ふことができるほど

の、細い橋脚を行かねばならない。橋脚には手すりがついてはいるのだが、頼りなげに感じてしまう。そこをまた奥に進む。

船長がふりむいた。

「……ここは貨物室だ。飛行船を動かすには莫大な経費がかかる。とても乗客運賃だけでは採算がとれない。そこで高速郵便で穴を埋めるというわけだ。貨物室にあるのはすべて葉書と封書さ」

「貨物室の後ろにも乗務員用の部屋があるようですね？」

「そうとも、整備士や機関士の部屋だ」

整備士や機関士は、飛行船船体やエンジンの点検、故障したときの応急処置をするのが任務だ。天井裏のアームに命綱をつけ張り付いていた整備士たちが手を振っている。

「船長、そのこが例のお姫様ですか？」

「そうだ。デートの最中だ。うらやましいだろう！」

「うらやましいなんてもんじゃない、とんでもない役得だ。船長、今夜は部屋に鍵をかけておいたほうがいいですよ。後でみんなで寝込みを襲いに行きますからね！」

シナモンが長いスカートの両裾をつまんで会釈すると、（おおっ！）と歓声が上がった。

「気のいい奴らだよ」

「いったい、乗務員は何人いらつしやるのですか？」

「乗客二十五人に対して、乗務員は九十人だ」

「そっ、そんなに？」

シナモンは目を丸くした。

「それがサービスつてもんだ」

船長は、にやり、と笑った。

「ときに、姫、十八歳の誕生日おめでとう。さあて、操縦室に行くぞ。回れ右、ここから二百メートル先にあるんだ」

「大佐、私をだましたのですね？」

「いや、ちょっと、奴らに君を見せびらかしたくて回り道をしただけだよ。わっはっはっ……」

船長が早歩きぎみにして行く。シナモンが小走りして後を追った。

第4章 晩餐会

？ミュシャの回廊？を通って食堂に向かう二人連れがいた。当時の日本人としては背の高い佐藤と、平均的な身長の中居である。盛装すると佐藤も中居も貴公子のようにみえなくもない。ただし、かしまつていればの話のだが……。

「ねえ先輩、飛行船のオーナーはオーストリー国籍のユダヤ人ですよ、食事もオーストリー風ですかね？ それとも船長はイギリス人でしたからイギリス風ですかね？ 意表について中華風とか」
「馬鹿か、飛行船？シルフィー？は国際便だ。となったらフランス料理に決まってるだろ」

「そりやまたなんで？」
「ヨーロッパにはまだ王制をしく国もいくつか残っている。その宮廷料理をみえる。ほとんどがフランス料理だ。なぜかといえば、フランス料理には癖がないから万人受けするんだ」

中居は上目遣いに、佐藤の顔を見上げた。

「さすが先輩は顔が広いですねえ、尊敬しちゃうな。ヨーロッパ諸王国の宮廷料理を食べ歩きしたんだあ？」

「中居……殺すぞ」

二人が少し歩くと、黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人と老紳士の二人も部屋から出てきた。老紳士のエドガー博士が二人を誘った。
「われわれも食堂に行くところなんだ。一緒に行こう」
中居が佐藤に耳打ちした。

姫様と僕たちって、なんか運命的じゃないっすか？

うむ。

素直ですなえ、先輩らしくもない。

うるっせえっ。

飛行船のシャンデリアに灯りがともされた。長テーブルの上にはS字意匠の刺繍がはいったピンク色のテーブルクロスが敷かれ、大皿の左右にはフォーク、ナイフ、スプーンが整然と置かれていた。中国人ボーイが、ワインクーラーで八度に冷やした食前酒を運んでくるころ、乗客二十五名の大半が席にそろった。

シナモンの席は乗客キャビン側の壁に沿った中程にある。シナモンをはさんだ左にはエドガー博士、右には佐藤と中居の席となっている。さらにシナモンの背後には、スチュワートのミッシェル青年が立って完璧な防御陣を敷いていた。というのは、シナモンが、
？将軍様？一行にからまれないように船長が配慮したためだった。防御陣の一角に腰掛けた中居は少しふてくされている。

なんで姫様の隣が俺じゃなくて先輩なんっすかっ！

ぐちゃぐちゃいうなよ、うるっせえっ。

ウェイターが手際よくコルク栓を抜き、客たちのワイングラスに食前酒を注いで回った。このとき中居がちょっとした異変に気づいた。

「あれっ、？将軍様？たちご一行がきませんね？」

「奴らなら寝室で酔い潰れていると思う。さつき？将軍様？ご一行の部屋があるあたりから、どんちゃん騒ぎの音がした。急に静かになったところを見ると酔い潰れたんだらうよ。」

佐藤は無然としている。船長がやってきて、

「皆様の楽しい旅を祈って乾杯！」

と音頭をとる。客たちがグラスを鳴らしあい宴が始まった。シナモンが笑みを浮かべてエドガー博士にいった。

「おいしいワインですね」

「ローラン・ペリエ・ブリュットです」

中居が佐藤にきいた。

「ローラン、ペ……ペ……？」

「ローラン・ペリエ・ブリュット フランスワイン。白葡萄品種シャルドネの原酒をベースにした淡い黄色のスパークリングワインでな、ブリュットは辛口を意味する。グラスの底から気泡を生じる時間は長く、ゆずと薑のコンポートのような甘酸っぱい香りが漂い、食欲をそそらせるんだ」

「先輩、うんちく本を丸暗記しましたね？ ワインの味も知らないくせに」

「うるっせえっ！」

佐藤は中居を小突いた。晚餐のメニューは次のようなものだった。

前菜はオマール海老^{えび}のムース。素材をすり身にしてトマトのきざみを加え、クリーム状にしてからゼラチンで固めて冷やしたものだ。海老の風味に、ほのかな甘みと酸味が絶妙に加わる。

スープはコンソメ。琥珀色に透き通っており、塩気もほど良く豊かな味わい。

主菜は魚料理と肉料理の二品だ。

魚料理は、長江河口で水揚げされる上海蟹しゃんはいがにを用いたフリカツセで、素材をクリームであっさりと煮込んだもの。桃のシャーベットで口直しすると、すぐに肉料理がでてくる。

肉料理は中国安徽省産あんきしやうの雉を用いたオレンジソースのソテーである。雉肉の香ばしさを酸味の加わった甘いソースが引き立てる。

デザートは、赤ワインの渋みで甘さを抑えた洋梨のコンポート。これにインド紅茶のダージリンが添えられる。

中居は佐藤にいった。

「フランス料理は気取っていて、ナイフとホークをうっかり揃えたりでもしたもんなら、『まだ食事中だ』といっても、ウェイターがすました顔でさげちまうとか、小出しするからフルコースをとっても腹がいっぱいにならないとか　そんな話しは嘘ですなえ」

「そうだ。気さくなふりをした気取り屋がそんなことをいいふらすんだ。フランス料理は会話を楽しみながらくつろいで食べるものだ」

シナモンが、佐藤たちのほうをみて、

「佐藤様に中居様はフランス料理がお気に召したようですね」といった。佐藤と中居が顔を見合わせた。

レディー・シナモンの日本語がまたうまくなった。こっちの話していることを理解している。三週間で一か国語をマスターするって話しは嘘じゃない。

エドガー博士は微笑むと、前菜をゆっくりと口にしました。

姫君と三人の騎士たちのテーブルを挟んだ相向かいには、いかにもゴシツプ好きそうなセレブ夫人が陣取っている。肥っている。香水の匂いがきつい。シャネルだ。

このセンス、アメリカ人か？

佐藤がつぶやいた。シナモンが、

「もしかして、アームストロング夫人ではありませんか？」

ときくと、夫人は答えた。

「やっぱり、レディー・シナモンね。私もさつきから気になっていたのよ。殷墟の観光ツアーは楽しかったわ……」

佐藤が中居を後目に小声でささやいた。

うるせえ婆さんだな……中居、おまえより上手がいるぞ。

そりゃどうも。

エドガー博士がシナモンにきいた。

「お知り合いかね？」

「はい」

シナモンは少し困った顔で笑った。アームストロング夫人の銃弾のような言葉は止まらない。

「……巨大地下宮殿の真ん中には王の棺跡、王の棺跡の横には貴族殉死者たち、さらにその周りには首を切られたおびただしい奴隷たちなんて残酷！ 奴隷には子供の骨まであったわ。かわいそうで、かわいそうで、涙が止まりませんでしたわ」

アームストロング夫人の話し方はまるで機関銃だった。

中居は夫人の喋り方をあまり意に介しないようで、閉口している佐藤にまた質問した。

「殷墟って？」

「殷墟は中国の古代王朝の殷の時代の都だ。中国の歴史書も古くなると伝説と混ざってしまっただけで、実在が疑問視されていた。ところが最近、河南省安陽県から殷の都が発見され、その王墓が発掘され

ているんだ」

佐藤は、ウエイターが注いだワインをゆっくり口にした。

殷墟は、東西を横切る安陽河を挟んで南に都城、北に王墓とに構成される。王墓は巨大な地下構造をしており、平面形は漢字の？亜？のようになっている、また断面形は階段状になっている。一九二八年に開始され、三八年に第二次世界大戦のため中断し、五〇年に再開、七〇年代にほぼ全容が明らかになった。この物語は第二次世界大戦の少し前であるから、旅行者たちは発掘作業風景を垣間見ることができたのである。

このとき、シナモンは、少し前に書いた手紙の内容を思い出していた。

ロンレンス様へ

私は殷墟の見学ツアーに参加しました。遺跡は乾いた平原にある農村地帯の一角にありました。私たちを乗せたバスは、悪路を通ってどうにかここにたどり着きました。その一行の中には興味深い方たちが乗っていらっしやいました。一人は紳士で、もう一人はかなり年輩のご婦人でした。

婦人は生け贄の奴隷たちを目にして涙を流し、さかんに聖書の一節を唱えて祈っておられました。私が、その方に、「いかがなされたのですか？」とお声がけしましたのですが、「なんてことを、なんてことを……」と繰り返すばかりでした。老婦人の横にいらっしやった紳士もお祈りしていました。よく話をうかがうと、ロンレンス、あなたのお兄様だとわかりました。もちろん老婦人はお母様です。お兄様は、中国で牧師として布教をなされているのだとか。

あなたに初めてお会いした日のことや、お手紙をやりとりしてい

ることをお話ししました。奇遇です。

シナモンより

ロレンスの返書には、（家族の消息を教えてくれてありがとう。でもこれからは不要だ。母のことがあまり好きじゃないんだ）と書いてあった。ロレンスの一家には修復しがたい亀裂があるようだった。

アームストロング夫人が、その話を蒸し返してきた。

「そういえばレディー・シナモン。殷墟へのバスツアーでロレンス親子にお会いしましたわよね。奇遇よね、あの？アラビアのロレンス？のお母さんとお兄さんだったなんて！ そういえばあなた、ロレンス様と文通なさっていらっしやるのでしょ。ねえ、私にも紹介してえ……」

前菜が終わって魚料理が運ばれてきた。中居がフリカッセを食べている佐藤にきいた。

「？アラビアのロレンス？……なんですか？」

「トーマス・エドワード・ロレンス中佐。先の大戦中、アラビアで活躍したイギリスの英雄だ」

「イギリスの軍人がなんでアラビアに？ 主な対戦相手はドイツでしょうが？」

「そうだ、イギリスはドイツに主力をぶつけたかった。イギリスとしては、ドイツの同盟国だったトルコなんぞに貴重な戦力を回したくない。そこで目を付けたのが、トルコの支配下に置かれていたアラブ勢力だ。アラブ人にトルコに反乱するようにたきつけた。そし

て送り込んだのがロレンスだ」

佐藤は魚用のスプーンで蟹の身を一口食べ、話を続けた。

「……ロレンスは、メッカ太守の息子ファイサル王子の軍事顧問となり、砂漠の民ヴェドウィンとともに、アカバやダマスカスといった重要都市を開放し、圧倒的な戦力を誇るトルコ帝国を攪乱し、イギリスのドイツに対する勝利に貢献した」

中居が口に入れかけたスプーンを止めて、

「すんげーっ！」

と叫んだ。佐藤がまた話しを続けた。

「マスコミに騒がれていてな、社交界のご婦人方のカリスマになっている。しかし、あの姫様、ロレンス中佐とも交友関係があったのか。うーむ、なんて顔が広いんだ！」

「姫様は小顔ですよ、先輩」

「うるっせえっ」

エドガー博士がフォークを止めて佐藤と中居を見遣った。

「ロレンスはもともと考古学者だった。大英博物館に所属したこともあるんだよ。私のかつての同僚だ」

「えっ、ロレンスさんをご存じでしたのね？ 私、あの方に出会ったから考古学を始めました。オクスフォード大学に入学したのもあの方の母校だったからです！」

シナモンは、何か大発見をした童女のように目を大きくして老紳士のほうをむいた。中居は佐藤に小声でいった。

姫様、意外とミーハーなところがあるんだなあ。

ミーハー？ ただのミーハーがオクスフォードへいくかよ。

老紳士は話しを続けた。

「……ロレンスは高校生のときフランスを自転車旅行し、大学生になると中東を徒歩旅行している。そしてヨーロッパと中東の城塞様式を年代別に分類して、系譜卒業論文では、『十字軍がヨーロッパに中東の城塞様式をもたらした』という当時の定説を覆し、逆に『十字軍が中東にヨーロッパの城塞様式をもたらした』という説を発表し証明したのだ。一介の学生の卒業論文が学界にセンセーションを巻き起こしたんだ」

「すんげえーっ！」

中居がまたまた叫んだ。

そこでまたアームストロング夫人が話しに割り込んできた。

「ロレンス中佐にはいろんな話があるわよ。エリザベス一世の愛人だったウオーター・ローリー卿が先祖だったとか。准男爵であらせられたお父様はその遺伝子を継いでか、娘の家庭教師だったセアラさんと駆け落ち、そしてロレンス兄弟が生まれたのだとか、おほほほ……」

アームストロング夫人は孔雀羽の扇子で口を隠して笑い、また続けた。

「……お母様は厳格なカソリック信者であつたので、お父様との関係は深刻なトラウマそのもの、トラウマの矛先はご兄弟にむけられたそうよ。児童虐待よね。ロレンス大佐は、おかげで女の人には興味を持たなくなり、？ホモ？になったという噂もあるわ。まあやだあつ、私つたら、はしたない」

まるでゴシップ雑誌。

シナモンたちは、すっかり閉口した。

魚料理から肉料理になった。夫人はそれからしばらく食べることに

に専念しだしたので、姫君とその騎士たちにはしばしの平安が訪れた。シナモンは左隣にいるエドガー博士の長い指先が器用に動き、ナイフやフォークで、芸術的なまでに骨のついた雉肉をさばっていくのを何気なくながめていたのだった。

さらにシナモンは食堂をもう一度見渡した。船長は乾杯の音頭をとってからすぐに司令ゴンドラに戻ってしまっているからここにはいない。？将軍様？一行も泥酔中とのことでもたいたない。妖しげなサングラスの日本人、それにチャイナドレスの中国人は、離れた席に着いている。

食後、佐藤と中居が、

「口直しに、下部デッキにあるバーに行きませんか？」

シナモンとエドガー博士を誘った。四人は螺旋階段を降りてバーに入った。

四人はバー・カウンター席に並んで掛けた。店内では恰幅の良い黒人ピアニストにより軽快なジャズが奏でられている。？騎士？たちはスコッチを注文し、姫君は？ダービーカクテル？を注文した。

中国人バーテンが、鮮やかな手振りで、ウイスキーやライムジュース、その他を調合して、ささつ、とシェイクする。琥珀色となった中の液体をグラスに注ぎ、ミントの葉を添えた。イギリス人は、競馬が近づくと、？ダービーカクテル？を好んでのむという。シナモンも気に入ったようだ。

黒人ピアニストが、黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人に、

「唄ってください、余興です」

と声をかけてきた。シナモンは、

「シャンソンなら……」

と返事した。唱ったのはパソ・ドブレのリズムで軽快なパリ讃歌
「サ・セ・パリ」である。

佐藤と中居、それにエドガー博士までも立ち上がった。一般に貴族・上流階級の人は、酒の席で唄うのを好まないのだけれども、シナモンはあまり気にしないようだ。ピアノに合わせて流行のシャンソンを何曲か唄った。エドガー博士は感嘆している。

「おおっ、？コンウォールの才媛？、こんな才能もあつたのか！」「中居などは、

「姫様、すんげえっ、ほんものの歌手になれる　」
といて惚けた顔になっている。

このとき、佐藤の目に、カウンターの壁にたてかけられているクリムトの？接吻？が目飛び込んできた。金屏風のような背景、毒々しい色彩、リアルに描かれた男女、退廃的な、死の影……。

客たちが喝采し、軽やかでハスキーなシナモンの美声の余韻に浸っていたとき、スチュワートの青年を従えた船長が、バーに飛び込んできた。

「ひっ、姫、大変だ。来てくれ！」

いつもは沈着冷静な髭の船長が明らかに狼狽している。船長とミッシェル青年、シナモンにエドガー博士、それに佐藤と中居が続ぎ、螺旋階段を駆け上っていった。

第5章 殺人現場

下部デッキから螺旋階段をつかい上部デッキへ移動し、乗客キャビンに向かうとT字路にぶつかり、そこから左右に分岐した通路は、それぞれ奥に行くと直角に折れ曲がるため、螺旋階段からみると乗客キャビン通路はちようど？コ？の字を描いたような形だ。

左右に分かれる通路のうち、右舷側にあるのが十二部屋、左舷側にあるのが十三部屋となる。右舷側が左舷側より部屋数が一つ足りないのは、一部屋が掃除用具をしまう物置部屋となっているため、それゆえ客室は二十五部屋となるのだ。

船長とスチュワートの青年が案内した部屋は、乗客キャビン右舷側で最も奥となっている二〇号室であった。スチュワートの青年ミッシェルがドアを開けると、人の気配がない部屋から酒と煙草の匂いがしてきた。中居が部屋をのそきこむやいなや、

「ぎゃあーっ、しっ、死体ーっ！」

と悲鳴をあげた。その中居を払いのけるように、佐藤が落ち着いた様子で部屋を検分すると、？將軍様？ご一行四名が全滅しているのが判った。

「やっぱり、こいつら殺されたか」

「見ての通り、酒を飲みながらカードゲームに興じていたときに死んだようだ」

と船長が説明をした。遺体はいずれもソファののけ反った格好になって死んでおり、争った様子もなければ外傷もなく、毒殺の可能性が高い。

黄色い壁の部屋の中央には、アールヌーボー様式のテーブル、サ

イドテーブル、二つの椅子、壁際のソファークラッドが配置されていた。

またテーブルには、ゲーム中のカード、人数分のグラス、飲みかけの白ワインボトル一本とグラス四個があった。さらに、サイトテーブルの上には呼び鈴、床には未開封のボトルが四本、開封されたボトルが三本置いてあった。

船長は、シナモンを振り返って帽子を外し、

「ご婦人に死体なぞみせるべきではないと承知はしているのだが

先日、父上にお会いしたとき、君をこんなふうに住んでおられた……」

と、すまなそうに言って、また続けた。

「……姫、君は修道院修行時代、故郷のコンウォールに帰省したとき、地元警察が解決できなかったいくつかの事件を見事に解決したそうじゃないか。？コンウォールの才媛？という君の異名もこのときついたそうだね？」

シナモンはまだ部屋の中をみてはいない。その人が船長に、

「？シルフィー？が東京に着いたとき、地元警察に調べてもらうのが良いのでしょうか？」

と率直にきくと、船長は激しく首を横に振った。

「そういうわけには行かない。警察が飛行船に立ち入るといことは、お客様を飛行船に足止めすることになるし、運行にも支障をきたす。前にも話したように飛行船のフライトには莫大な経費がかかっているんだ。そして何より、こんな事件で、？シルフィー？が受けるイメージダウンを最小限にしたい」

「それには、東京到着後に警察に調べさせるのではなく、フライト中に事件を解決し、犯人を警察に引き渡したい。……と、そうおっ

しやりたいのですね、船長？」

老紳士が船長にそうきくと、船長は憮然として、「そうです」と短く答えた。

シナモンは、やや間をおいてから、当惑している船長の顔をのぞきこんだ。

「遺体と、遺留品には手をつけていませんね？」

「つけていない　　姫、引き受けてくれるんだね？」

腹のどばった船長が小躍りして、シナモンの手をとった。

「はい……乗員名簿、乗客名簿、それから飛行船の見取り図をください」

そういつて、シナモンは？ 將軍様？ の部屋の全容を入り口から観察している。中居は佐藤に小声でいった。

すっげーっ、姫様、肝すわってる。遺体をみても悲鳴をあげないんすっね。

そうだな。

佐藤も珍しく中居に同調していた。二人の言葉をきいたシナモンは、振り返っていった。

「遺跡を調査していると、ときどき遺体が見つかるときがありますのよ。大概は白骨化していますが……」

黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人は、ハンドバックから調査に使う白い手袋を取り出して、ドレスアップの手袋と交換した。

「……河川や沼地のほりにある低湿地遺跡、あるいはエジプトのような乾燥地帯では、遺体が腐らず残っていることがあります、私はそうしたケースの遺跡調査にも何度か立ち会ったこともあるのです。ですから、遺体をみてもパニックにはなりません」

シナモンは振り返って言葉を続けた。

「中居様、お手持ちのカメラのフィルム残数はそこそこおありですね？ 私が部屋に入る前の現状記録として、撮影をしていたかどうかの記録をお願いします」

「光荣です。俺をばんばん使ってください」

中居が部屋の中を何枚か撮影し終わると、シナモンはハンドバックから、フィールドノートとペン、それからメジャーを取り出した。フィールドノートは方眼目がついた手帖で、メジャーはドイツのヘキトマス社製携帯用である。それらは遺跡調査の過程で見取り図を作るのに役立つ小道具だ。

エドガー博士は、半ばあきれ、また感心した。

「レディー・シナモン、君はいつも、そんなものを持ち歩いているのよね？」

「私の今回の旅行の目的は、世界中の遺跡と博物館を巡ること。真実を読みとるためには、カメラ写真だけでは不十分ですから……」
「君の論文をいまずぐにでも読んでみたいよ」

シナモンは微笑んだ。……シナモンがしゃがみ、立ち上がり、くるりと回転してこちらを振りむいたかと思えば、また後ろをむく。それからスチユワートのミッシェル青年に手伝ってもらい、遺体と遺留品の間隔をメジャーで測り、一気にフィールドノートへ現場の概略図を描きこんでいった。普通、人間が、まとめて数値を読みとるのは七つまでとされている。ところがこの人は、測った何十点もの数値を、なんと、いっぺんに記憶し、一気にノートに書き込むというはなれわざをやったのけてみせた。

佐藤は、調査を行うシナモンの身のこなしにすっかり魅了された。

機敏でなめらかな一連の所作はまるで風に舞う妖精のように、口からほとばしる数値の羅列は福音の詠唱のようにさえきこえる。優雅だ、あまりにも完璧で美しい！

シナモンは遺体の口の近くにフィールドノートを寄せ、扇子で煽るかのように残臭を調べた。このことについて中居が、佐藤にいつもの調子で質問した。

「姫様、何してるんっすか？」

「この事件、毒殺の可能性が高い。毒薬の一つ青酸カリの場合、遺体の口からはアーモンドのような匂いがするそうだ。それを調べているんだよ」

「知らなかった。姫様すんげーっ！」

「常識だ」

佐藤の白い目を、中居はまったく意に介していない。

エドガー博士がシナモンに、「手伝うよ」といって現場に入った。シナモンは、

「これから、キーワードを申します。書き取っていただけますか？」

といって、博士に、フィールドノートとペンを渡した。

「了解した」

船長が、博士にたずねた。

「姫は、博士に何をメモさせようとしているのでしょうか？」

博士は、フィールドノートのまだ書き込んでいないページを開いた。

「報告書を作るために、研究者は？遺構カード？というものを作ります。考古学用語でいうところの遺構は、城館跡や古墳それに住居跡などをさし、これら遺構からの出土品を遺物といいます。遺物は土器・金属器・石器などをいいます。レディー・シナモンは、？犯行現場？という？遺構カード？を作っているのですよ」

船長が感心して博士に確認した。

「つまり、考古学の調査方法と犯罪の捜査方法は手法が同じというわけですか？」

「さよう、考古学研究には観察眼と推理力の二つが欠かせない。遺構は犯行現場、遺物は遺体や遺留品に置き換えられる。レディー・シナモンはその二つに天才的なセンスをもっている、ときき及んでいる」
「なるほど」

黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人が、いよいよキーワードを唱えだしたので、老紳士は素早くメモを始めた。

「サイドテーブル、呼び鈴、ワインボトル、シャブリ、チーズ、毒薬……」

エドガー博士がフィールドノートにシナモンに返してほどなく、船医が、

「すまんすまん急患だったんだ」

と言い訳して、？現場？に駆けつけてきた。シナモンは船医に「遺跡についての問題は、？時間軸？と？空間軸？を解決することに焦点が置かれます。犯罪捜査も同じ　？時間軸？のほうは先生にお任せいたしますわ。？空間軸？は私にお任せくださいね」といって微笑んだ。

船医は判ったような判らないような顔で、それは佐藤や中居も同じであった。

反対に、シナモンの言葉をきいた船長はとても安堵した表情になった。

これらの人々とやや違った反応をしているのは、ミッシェル青年と博士だった。

青年は悪寒がする様子で小刻みに震えている。

博士は、懐中からロケットペンダントを開いて、画家になったという息子の写真を少し眺め、また閉じた。

『家宰の日記』より

私はリザード伯爵セシル家の家宰スイーツマン・ウルフレザー。

パリ発、ベルリン経由モスクワ行きの列車に乗り、さらにシベリア鉄道、満州鉄道を乗り継いで、韓半島南端の街釜山に達する。釜山から連絡船で北九州へ渡り、また鉄道を使って最終目的地である東京を目指していた。

途中、私には三人の連れができた。一人はドイツ人である。一人は退役将校でミュンヘン大学教授となっている人物。残る二人はオーストリアの技師だという。大学教授は、カール・ハウスホファーといい、そして残る技師二人は、オットー・スコルツェニー、そしてミューラーと名乗った。技師二人はまだ二十歳そこそこの若さのみえた。

食堂車で昼食をとっていると、老教授と二人の若者が、

「こんにちは家宰、相席していいですか？」

と訊いたので了承した。日本の食堂車の洋食というのは、まずいとはいわないが、オリエント急行のような豪華さはない。ヒレカツにカリーをかけたものと、ビールを私たちは注文した。

エビス・ビール。

「カーリーにビールというとりあわせ、フランス人ならなんというの
だろうか。まあ、ドイツもイギリスも美食には縁遠いという点では
お仲間のようだ。」

「間もなく東京ですね。私は当家の 姫様 のお宿やお車の手配を
しにここまで来たのですが、みなさんはどちらへ？」

教授は微笑を浮かべた。

「私は若い頃、ドイツ大使館の駐在武官でした。日本の陸軍省に友
人が多いですよ。彼らから講演を頼まれましたね。」

「ほう、どのような講演ですか？」

「ああ、 地政学 というものです。」

スコルツェニー青年は、そこで口を挟んだ。

「ハウスホフハー教授の 地政学 は地理学界に旋風をおこしてい
ます。『生存圏の理論』はドイツはもとより、世界中に影響を与え
ていて、日本では熱狂的な信奉者が数多くいます。」

スコルツェニー青年は、熱をおびた口調で教授のことを話した。

友人のミューラーはにこやかにうなづくのみで、あまり出しゃばら
ない。

『生存圏の理論』とは、……国家は、資源など、（体制を維
持するための？生存圏？というもの）を有しなくてはならない。こ
れを有しないドイツ民族は、生存するために軍事的な拡張政策を進
めねばならない……と主張する。危うい理論だとは思ったが、
人にはそれぞれ歩んできた人生というものがあり、そこで培ったも
のなのだから、例え誤っていると感じてても安易に否定できるもの
ではない。もちろん 異なる意見などしようものか。
アンチテーゼ

車窓の田園風景が、木造の建物の多い市街地へと変わり、それが煉瓦となって東京駅に着いた。私は三人と分かれて、駅でタクシーを手配し、帝国ホテルへと向かった。

第6章 シナモンノート

殺人が起こった部屋から、黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人が自室に戻ってきたとき、ベットメーカーキングは終わっていた。ソファから組み直されたベッドには？つた？の文様が施され、さりげなくS字をなしている。枕元に近い壁にある読書灯は、花をモチーフにした極彩色の色ガラスできており、やわらかで幻想的な光を放っている。

さあ、問題を整理いたしましょう。

シナモンは、ベッドに座り読書灯をつけ殺人現場で博士に書いてもらったフィールドノートを開いてテーブルに置いた。フィールドノートには、

「サイドテーブル、呼び鈴、ワインボトル、シャブリ、チーズ、毒薬……」

と書かれてある。フィールドノートの左右には中居が撮った現場写真、船長が準備してくれた飛行船シルフィーの概略図、それに船医の所見を示したカルテがきれいに並べられた。

A 殺人事件の概要

上下二層となるメインデッキのうち、上部デッキにあるのが乗客キャビンだった。黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人の部屋は二号室、老紳士エドガー博士の部屋は一号室、いずれも乗客キャビン右舷にある。殺人が発生した部屋は乗客キャビンの反対側にある左舷の二十号室となる。その二十号室は、降り口の螺旋階段からみて左

右に開いた通路のうち、左側通路のもつとも奥の部屋となっている。

1 船医の診断による被害者四人の死亡推定時刻と死因
午後四時から七時の間に殺害。毒殺と考えられるが毒物の種類を特定できない。

2 殺人現場
二十号室

3 被害者と主な遺留品の状態
被害者

四人おり、椅子とソファでのけ反った状態で死亡。（争った形跡や死後に動かされた形跡はない）

主な遺留品

遺留品1 カード一式（ゲーム途中で、四人の殺害後に偽装された形跡はない）

遺留品2 ワインボトル（未開封のボトル四本、開封済みのボトルが三本ある。

開封済み三本のうち一本は飲みかけ）

遺留品3 厚切りチーズの盛り合わせ皿（食べかけ）

……死亡推定時刻は、死後直後から発生する死斑の状態で判断できる。死斑は、被害者が仰向けで死んだとすれば背中側にでき、うつ伏せで死んだとすれば胸側にできる。そのため犯行を偽装したかどうか見破る基準となるのだ。

B 現場所見

被害者たちに刃物による刺し傷や首を絞めたような跡はない。苦しみがいた様子もなく、口からは唾液、胃液、血すらもでていない。まるで酔つてうたたねしたまま息を引き取ったかのように。なにか特殊な毒物使用による殺害と考えられる。

C 被害者の詳細

被害者1 劉真栄

生年は一八八五年、出身地は中国浙江省^{しやんせいせい}。地方軍事政権である軍閥^{ぐんわく}の最高権力者で、浙江省に地盤がある。通称は？将軍様？。二十号室 を利用。

被害者2 周回明

生年は一九〇〇年は、出身地は浙江省。通訳。二十一号室を利用。

被害者3 白穫

生年一九〇三年は、出身地は浙江省。？将軍様？警護役。二十二号室を利用。

被害者4 黄泰平

生年は一九〇七年、出身地は中国浙江省。？将軍様？警護役。二十二号室を利用。

D 遺留品の詳細

上に記した遺留品2と遺留品3に関する所見

遺留品2のワインの銘柄に関して

開封・未開封のボトルの合計は七本あり、すべてが白ワインである。すべてが白ワインのシャブリ。ただし飲みかけの一本だけ

がプルミエ区画、ほかはシャブリ区画の葡萄畑で収穫されたものを使用しているというラベル表示がされている。

遺留品3のチーズの銘柄に関して

タレジオを使用している。

……有名なフランス産白ワインのシャブリはシャルドネ種の白葡萄を使用している。色調は透明だが、微妙に褐色が入る。芳香は、発酵の過程で生じる、「洋梨、白桃の匂いを、メロンやバナナのような香りが包む」とされる。味わいは、「なめらかな酸味が甘みの中に溶けこむも、ちよつとツンとくる」と形容される。ツンとくるのは葡萄畑が石灰質だからで、「フリンティー」と表現される。「フリンティー」の由来は火打ち石銃の「フリント」に由来する。

なお、シャブリ区画のシャブリはフルーティーであるのが特徴だ。白身の肉、オマール海老のムニエルに合う。また、プティ・シャブリは生ガキに合う。そして、プルミエ・クリュのシャブリは、ほかシャブリよりも、いっそう香りが複雑な特上銘柄だ。

タレジオは、イタリアのロンバルディア地方産ウオツシュチーズだ。ウオツシュチーズのウオツシュとは、特殊な菌を植え付ける熟成の過程で、地酒や塩水で洗うのでそう呼ばれる。

ウオツシュチーズの外皮は淡いオレンジ色弾力性の食感があり、柔らかな香りがする。内面はクリーミーで、口の中でとろけるような食感がある。ウオツシュチーズに合うのは力強い舌触りのする赤ワインだ。

E 遺留品の所見

七本のボトルのうち被害者たちが最後に飲んだボトルは、いうま

でもなく飲みかけのボトルに違いなかるう。毒物はこれに混入されている。六本のボトルがシャブリ区画のもので、毒物混入のボトルがプルミエ・クリユ区画のものという点が気にかかる。シナモンは、それにしても、シャブリにタレジオなんて！

と思った。

被害者である？將軍様？は、ワイン好きのようだが、通ではないようだ。この組み合わせは最低だ。一般にワインとチーズは同一地方の銘柄どうしが相性がよいとされるのに産地が離れすぎる。しかも赤ワインむきのウオツシュチーズを肴に白ワインを飲むというのはどういふ感覚をしているのだ。

いかにも成り上がり者の俗物という印象で、飛行船搭乗のときの態度を思い起こすと許せなくなる。生前は殺されて当然のことをしでかしているに違いない。

だがさすがにシナモンは、そこまでノートに書かなかつた。

もう真夜中だ。

殺人現場から部屋に帰るとき船長に、明朝の朝食後から目撃者の証言と容疑者の絞り込みを行うことを伝えている。事情聴取場所は右舷奥の読書室においてである。

時計をみたシナモンは、ハンドバックからA3サイズの紙を一枚取り出してサイドテーブルの上に敷き、その上に、フィールドノートとペンを置いた。やがてその人がリボンをほどくと、ふわっ、と長い黄金の髪が舞い降りていく。色ガラス読書灯の明かりが消された。

第7章 オークルのまな板

ストーン・サークルをご存じだろうか？ 環状列石と訳される太古の遺跡のことだ。文字通り環状列石は切り出した岩石を円形に配列しており、内側や周囲を発掘すると、墓や道の遺構がみつかる。環状列石は、ユーラシア大陸全体に分布し、新石器時代から青銅器時代につくられたものが多い。

イギリスのウイルストンシャーにあるストーンヘンジが最も有名で、三六〇〇年前から三四〇〇年前のウエセックス文化期に属し、巨大な立石の下からは、斧や短剣といった青銅器が出土することがある。これら青銅器はミュケナイ文明のものによく類似しているという。

ミュケナイ文明とは、エーゲ海あたりの都市国家文明で、今のトルコ共和国にあるトロヤ（トロイ）遺跡があげられる。トロヤ遺跡はギリシャ神話の？トロヤの木馬？で有名だ。シュリーマンが発掘調査した。

環状列石は日本にも存在する。大陸でいう新石器時代に相当する縄文時代に多くつくられた。亜流には環状土塁というものもある。

イギリスのストーンヘンジは、巨大な日時計として夏至の観測にも用いられていたが、一般的なストーン・サークルの機能は？境界？であったらしい。？境界？とは？異界？への出入り口のことをさす。

中世騎士物語？アーサー王伝説？で彩られたイギリス南西部コン

ウォール半島の先端にリザード伯爵領リザード庄がある。シナモンの故郷だ。リザード庄には中世に築かれたリザード城と城下の港町があり、港町の郊外に出ると、ごつごつとした白い岩肌の断崖絶壁が海に臨んだ丘となっていて、その丘のことを地元では？かもめ岬？と呼ばれている。

一本道をたどって？かもめ岬？に登っていくと、羊の群が放し飼いにされた牧草地が斜面に広がり、頂きにたどり着くと、ストーン・サークルがたたずんでいるのに気づく。リザードのストーン・サークルは、やはり地元で？オークルのまな板？と呼ばれrている。オークルというのは、鬼族のことだ。

幼少期のシナモンは好奇心旺盛で、よく一人歩きをしては周囲を心配させたものだが、そんな小さな姫君の遊び場の一つに？かもめ岬？があった。煉瓦のように四角く切り出した巨大な岩石を立てて柱をなして円形に並べ、柱と柱をつないで梁にしている。その石の梁の上にはときどき不思議な男が立っていた。

男はふらりと、サイドカー仕様のドイツBMW社製オートバイに乗ってやってきては、またどこかに消えた。不思議に思ったシナモンが、

「ここでいつも何をしていたらっしゃるの？」

ときいた。男は振り返って、

「やあ、またあったね、？かもめ岬の姫君？」

「？かもめ岬の姫君？？ 私のこと？」

青灰色の瞳、女性的な容貌、どちらかといえば小柄だ。男は、小さな姫君の質問に答えた。

「ここに何しにきたかつて？ 今度、飛行機に乗る。だから？シルフィー？を捕まえに来たんだ」

「？シルフィー？？」

「風の妖精のことだよ」

男は人好きのする笑顔を浮かべながら、手にしていたロープの先を輪にして、ぶるんぶるん、と回転させるや、海風の吹く青空に放り投げた。風は西から吹いてくる。

「そーら、捕まえた」

男はロープを引き寄せ、みえない？シルフィー？を抱きしめた。

「僕が飛ぶとき、後を押せ！」

と笑ってロープから、？シルフィー？を解き放って、鳥を野に返すかのように両手を空に広げたのだった。？かもめ岬の姫君？も笑って、

「私は、ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザードです。シナモンとだけおよび下さってもさしつかえありませんわ」

と名乗り、スカートの両端を軽くつまんで優雅に一礼した。これにあわせて男も、中世の騎士のように片膝を着けて、うやうやしく一礼した。

「僕は、トーマス・エドワード・ロレンスっていうんだ。ロレンスでいい。シナモン姫はリザード伯爵の娘さんだったんだね」

「ええ、そうですね。……ところでロレンス様、あなたがいま抱きしめた？シルフィー？のことですが、空気を抱いていたとしかみえませんでした。？シルフィー？は、ほんとうにいたのですか？」

「はははっ……、？シルフィー？は風そのものだ。僕らは風をみることはできない。けれども風が通ったことは判る。風が通りすぎる

と草や木が揺れるだろう。このストーン・サークルもそうだ。ストーン・サークルが何なのかは判らない。けれども大昔の誰かが、何かの目的でつくったのは間違いないんだ。大昔の人は何かの手がかりを残していく、それを調べる学問がある。考古学っていうんだ」

小さな姫君はちょっと首をかしげてから右手人差し指を唇にあてた。

「風が吹けば草木はゆれる。原因があるから結果もある。考古学…
…そう、？シルフィー？と同じなのですね　ところで、どうして？シルフィー？をロープで捕まえるのですか？」

これは驚いた。姫君はとても賢い。

ロレンスは、？かもめ岬の姫君？がすっかり気に入って、話しを続けた。

「ああ、ウェールズの港町に伝わる古いおまじないだよ。こうやって？シルフィー？と遊んでやるんだ。？シルフィー？は悪戯者だから、かまってもやらないと船を岩に座礁させてしまうことがあるんだよ」

ロレンスは、石の梁から、柱の間にいくつかのくぼみを瞬時にみつけ、そこを器用に蹴り跳ねながら下に降りてきた。

さて、小さな姫君が失踪したりザードの城では上を下への大騒ぎである。そんななかでBMWのサイドカーが走ってきて、ゴンドラにちょこんと収まっていた姫君が、「ただいまあ、お友達をお連れしましたのよ」と手を振って笑った。

あつげにとられているリザード城の人々に、ヘルメットを脱いだ男が、「トーマス・エドワード・ロレンス」と名乗ったので、一同

はまた驚いた。

「ロレンス？ あつ、あの、？アラビアのロレンス？か？」

……神出鬼没のロレンスは、スピードの信奉者で、こよなく乗り物を愛した。少年時代は自転車、アラビアではロールスロイス・シルバーゴストの装甲車、イギリスに帰国すると快速艇、さらには飛行機にも乗った。地上ではオートバイでどこまでも駆け抜けていくまさに、風の妖精？シルフィー？のような男であった。

子供時代の楽しい夢だった。

シナモンは半置きして、寝る前に整理した？シナモン・ノートを一読すると、一度立ち上がってから椅子に座り、サイドテーブルのA3用紙に、キーワードをつぎつぎに書き込んで樹形図に仕上げた。

この事件、一本の樹じゃない……。

樹形図は、樹木の中心にテーマを書き込み、そこから幹枝を伸ばして重要度の高いキーワードをつぎつぎと書きこんで細分化していく、という思考整理のためのノート・テクニクの一つだ。進化論を唱えたダーウィンもこの方法で思考を整理したのだという。

樹形図を描いた用紙をハンドバックにしまい込んだシナモンは、黄金の長い髪を後ろに結って盛装した。部屋から通路に出ると、老紳士、それに雑誌？東京倶楽部？の記者とカメラマンが待っていた。まず開口したのはカメラマンの中居だった。

「姫様、朝からご機嫌麗しいですね、いい夢でもみたんすか？」

「ええ、とつても」

四人連れは、ミュシャの通路を通りぬけ食堂にむかった。

四人は、乗客キャビンから左舷プロムナードデッキにむかう途中の食堂に入り、長机の席に着いた。展望窓からは、淡く霞みかかった朝陽に溶け込んだ瀬戸内海の碧あおに、金粉を散りばめたかのような島々が点在しているのが眼下にできる。

食堂の長テーブルには、シロップを混ぜて半熟に焼き卵を塗ったトースト、？ヴリアサバラランチーズ？の蜂蜜添え、サラダ、アッサムの紅茶がウエツジウツドの染め付け白磁に収められ並べてあった。

老紳士、それに雑誌？東京倶楽部？の記者とカメラマンと朝食をともにしてから、黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人は、三人と分かれ、一人、読書室に入った。読書室には顎髭あごひげの船長が待つており、シナモンが昨夜、乗員乗客名簿からピックアップした人々を一人ずつ呼び出して話しをきくことになっている。

読書室は、黄色い塗装の室内に、黒く塗ったS字文様の意匠のある大きな木製の本棚が二つ並んでいる。椅子が五つあり、一人用と四人用テーブルが一つずつ置かれている。船長とシナモンは椅子に腰掛けて間もなく、重要参考人たちをスチュワートの青年が一人ずつ連れてきた。

？将軍様？たちの部屋と同じ通路である十六号室にいるのはアメリカのセレブ、アームストロング夫人だった。夫人はこちらから何もきかずとも機関銃のように勝手にしゃべりだした。

「夕食の前だったかしら、私が船内を一回りしてお部屋にも戻ろうとしたときのことですわ、日本人男性と中国人女性が歩いていました。なにかミステリアスじゃありませんか、あのお二人。私は忍び足でつけてみたのですよ……」

アームストロング夫人は、テーブルに置いてあったコップの水を半分一気にのんだ。

「……そのお二人、どこにいったと思います。それがあの？將軍様？お部屋の前あたり。そこでお二人はしばらくうろつろつなさって、スチュワートのミツシエルさんの足音に気づいてご自分たちのお部屋に戻られたのですわ……」

夫人は涙目になっていたので、シナモンがハンカチを差し出すと、ちいいんつ、と鼻をかんでまたしゃべりまくった。

「……こんな素敵な旅行で殺人事件だなんて！ おおっ怖い。しかし、あの二人、なのにも二人寄り添って　もう、い・や・らし・いいいっ！」

夫人はしゃべるだけしゃべると、すっきりした様子で読書室から出ていった。

髭の船長が隣の席に座っているシナモンにいった。

「いよいよ問題の二人だな」

スチュワートのミツシエルがチャイナドレスの女を連れてきた。女の名前は紅舜蓮こうしゆんれんといい二十二歳になる。中国上海市出身の舞台女優で、部屋番号は十七号室、？將軍様？と同じ通路にいる。紅舜蓮は完全黙秘を通し、ミツシエルに送られてまた部屋に帰された。

顎髭の船長はいらいらした様子だ。

「話しにならない。姫、次の日本人も同じだろうよ」

「では、？シルフィー？にお願いしてみましようか。風が吹けば草木もたなびくでしょうから」

黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人がまじめな顔をして、？かもめ岬？で出会った？アラビアのロレンス？をまね、ロープの代わり

に右手人差し指を、くるくる、と回してから急に立ち上がり、ぱつ、と宙を両手でつかんだ。

さあ？シルフィー？、私に素敵な風を送って下さいな。

そうささやいてから、小鳥を逃がすような仕草で両手を開いた。

船長は腹を抱えて笑い転げた。

「わっはっはっ……。なんだいそりゃ？」

「ウェールズのおまじない。ロレンス様に教わりましたのよ」

「あの？アラビアのロレンス？に？ おもしろい奴だ。一杯やりた
いね」

「お伝えしておきますわ」

？おまじない？の効果はてきめんだった。

紅舜蓮に代わってスチュワートの青年が連れてきた日本人の男が入ってくるなり、シナモンはハンドバックから小さな薬包をとりだしてみせた。

「紅舜蓮様からこれをお預かりしてますの」

男の顔色が変わって、ちっ、と舌打ちした。

すかさずシナモンは日本人の男にきいた。

「薬包の中身は砒素ですね？ 紅舜蓮さんは、『？將軍様？を毒殺した』とおっしゃっていましたわ」

「くっ、くそおっ、おしゃべり女めっ」

船長は、（すっ、すごい、姫はほんとうに風を吹かせたわい）と思っただが余計なことは口にしなかった。

シナモンは膝に置いたノートを手にして彼の名前が書かれた頁をめくった。男の名前は夢野久作、二十八歳。日本国籍で上海に在住する作家だ。紅舜蓮の隣の十八号室にいる。男は自供を始めた。

……二年前のことだ。上海在住の人気映画女優紅桂蓮はストーリーカ
ーに悩んでいた。ストーリーカーというのはあの？將軍様？とその一味
である。あまりにも執拗なので、紅桂蓮は悩んだあげく自殺してし
まった。そんな紅桂蓮の姉が紅舜蓮で、妹の密かな婚約者が夢野秀
作だった。

殺されたも同然の銀幕スターのために残された二人は復讐を誓い
合い、？將軍様？の隙をずっと狙っていた。？將軍様？は日本びい
きであったため、日本軍部に招かれ飛行船？シルフィー？に乗るこ
とになった。？飛行船？に乗れば、当然の事ながら警護は手薄にな
る。それを知った二人は全財産を投じて搭乗チケットを買ったのだ。

そしてスチュワートのミッシェルが、ルームサービスに呼ばれて
ウォッシュチーズ？タレジオ？をカートに載せて？將軍様？に届け
にいくとき、部屋の前で夢野は、呼び鈴を鳴らしてミッシェルを呼
び止めた。

「手洗いの使い方慣れなくて……、もう一度教えてくださいよ？」
ミッシェルは仕方なく夢野の部屋に入った。その隙をうかがって
いた隣室の紅舜蓮が、カートのチーズに砒素の粉末を振りかけたと
いうのだ。

自供をきいた船長は膝を叩いて、

「姫、事件を解決してくれてありがとう」

と礼をいった。ところが当のシナモンは首を横に振った。

「確かに二人はチーズに毒を盛りましたし、？將軍様？一行はチ
ーズを食べたのですが、結果的に死に至りませんでした」

「それはどういうことだね？」

船長はきき返した。シナモンはテーブルの上に用意されていたコップに、先ほどの薬包を開いて粉末を落とし、

「ワインには砒素に対しての解毒作用があります。事件のときにワインを飲んでいた？将軍様？たちが砒素を盛ったチーズを食べても死にはしません。たとえばこんな具合に……」

と喋って口にした。隣にいた船長は慌てた。

「ひっ、姫っ、それはワインじゃない。ただの水だ！」

けれどもシナモンは平気な顔である。

「ああ、この薬包ですね。実はお砂糖でしたのよ」

夢野が、「よくも一杯食わせたな」とじだんだを踏んだ。黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人は、

「こうでもないかと夢野様も紅様と同じく黙秘なさったでしょう？」と申し訳なさそうな顔をした。

さて、図書室の壁の裏側に猫のように床をはって、中をのぞいている二人の人物がいた。二人といえばもちろん、雑誌？東京倶楽部？の記者とカメラマンの中居である。中居が佐藤に耳打ちした。

（せっ、先輩、ワインが砒素の解毒剤だなんて俺知りませんでしたよ）

（いつものことだ。まあいい、それにはちよいとしたエピソードがあるんだ……）

……欧州でもっとも毒薬が盛行したのは一六世紀から一七世紀にかけてのことで、毒薬が地下産業として成立していたほどだった。王侯貴族たちは政敵に一服盛り、若い燕を囲う浮気な有閑夫人たち

は頭の薄くなつた亭主に一服盛つたものだった。

たとえ有閑夫人が、裏路地の一隅に住む妖しげな老婆のところ
亭主のシャツを持っていったとしよう、老婆はシャツを毒薬液にひ
たして返してくれる。これを何回か繰り返していると、やがて夫は
衰弱死することとなり、世間では？病死？ものとみなされる。夫人
が泣き崩れる演技をするものだから誰も疑わない。

そんな暗殺者の中でもっとも人気が高かつたのは無味無臭が売り
の砒素である。犠牲者たちに、多量に盛れば速効で、微量ずつ盛れ
ば数年かけて病気のように偽装して殺すことができたというわけだ。

佐藤が顎の下をかいていった。

つねに暗殺の対象となる王侯たちは躍起になつて解毒剤の開
発を進め、死刑囚の同意のもとに人体実験をした。

『実験に成功したあかつきには、特赦放免にしてやる』とで
もいったんすかね？ 先輩。

おまえ、賢くなつたな！

先輩のご指導の たまもの 賜ですよ。

中居、おまえにほめられると、なんか、腹が立つのはなぜな
んだ？

そういわれた中居の視点が天井にいった。佐藤は続けた。

おびただしい人体実験の結果、ついに砒素の解毒剤を発見したのはフェルディナンド公から命を受けたイタリア半島シエナ出身の医師マツチオリだった。マツチオリはワインが砒素に対して解毒作用があることを証明した。一六世紀のことだ)

中居はそこで、何かを思いだしたかのように佐藤にきいた。

そういえば先輩、現場検証のとき、姫様がアーモンドのような臭いがあるかどうか確かめていましたよね。確か青酸カリで毒殺したとき、遺体の口から臭うんだった……。

実は青酸カリというのは毒殺にはあまりむかないんだ。というのは、青酸カリを口に含むと強烈な刺激を舌に感じるからなんだ。それはアンモニアのようだともガソリンのようだともいわれている。しかもだ、おまえみてえな凶太い奴には、一服もつても死なないときがある。だから青酸カリは暗殺というよりは自殺にむくんだ)

えっ、俺、こうみえても繊細っすよ。いつも先輩にいじめられて何度枕を涙で塗らしたとことか、ううっっ……。

おまえの泣くてもしかして、アンモニア臭がするだろ？。

ひでーっ、先輩、ひでーっ！

青酸カリについてはこんなエピソードがある。一八世紀にあったドイツの領邦国家プロイセン王国は、宗主国であるオーストリア帝国に反抗して七年戦争を引き起こし勝利した。

プロイセン王国の人口は四〇〇万、対するオーストリア帝国の人口は八〇〇〇万という絶望的な戦争だった。プロイセン王国の陣頭

指揮をとっていた英雄フリードリヒ大王は、背水の陣を敷かざるを得ず、いつもポケットに自殺用の青酸カリを忍ばせていたのだという。

スチュワートの一人が夢野を部屋に送り届けると、代わりに、先ほど紅舜蓮をお口届けたミッシェル青年が戻ってきた。船長はまたいらついできて乱暴に頭をかいている。

「さっぱり判らなくなつた。　で？　姫、？將軍様？に直接手をくださったのは一体誰なんだ？」

一同は背筋に、ぞくつ、とくるものを感じた。それは、？コンウールの才媛？の眼孔が、ほんの一瞬だけではあつたが、獲物を狙う鷹のようになったからである。

風が吹かなければ草木は揺れません。原因があるからこそ結果があるのです。？將軍様？に直接手を下したその人は……。

「……ミッシェル様、あなたです」

容姿端麗なミッシェルの血の気が、さーっ、とひくのの後目に、黄金の髪を後ろに結つた貴婦人は淡々と言葉を続けた。

「船医さんの所見では被害者の死亡推定時刻は午後四時から七時の間。ちょうど飛行船が飛び立つ時間帯ですね、ミッシェル様？　このとき私は食堂に居合わせ、偶然、？ミュシャ？の通路から『計画を変更せねば』という紅様と夢野様お二人の話しをきいております。つまりこの時点でお二人は？タレジオ？チーズに毒を振りかけましたが、解毒剤となるワインを飲んでいるということに気づい

たわけです」

船長は信じられないという表情で、どきまぎしているミツシエルの顔をのぞきこんだ。シナモンは一度、船長のほうをむいてから、またミツシエルをみつめた、

「アームストロング夫人が？ 將軍様？ の部屋の前でお二人の姿をみかけています。けれども、次の策をもっていなかったお二人は部屋の前でぐるぐる回るほかなかった。そこであなたが登場する。アームストロング夫人も、（スチュワートの気配に気づいて二人はその場を離れた）と証言しています」

そこで船長が割り込んできた。

「なるほど、スチュワートがワインに毒薬をいれれば怪しまれない……しかしなんでまたミツシエルが？ 將軍様？ を毒殺するんだ。動機は？ だいたい砒素も青酸カリでもない毒薬とはなんなのだ？」

「考えられるもつとも単純な動機は？ お金？。そして飛行船内部でワインボトルに毒を混入したのではなく、はじめから毒の入ったワインボトルを持ち込んで、手渡されたのだとしたら……。ワインを口にするこゝとよつて九死に一生を得た？ 將軍？ 一行にとどめを刺したのは間違いなくミツシエル様です。犯行を実行しすぐ、私はあなたにワインボトルを手渡した黒幕ともいふべき方であいました」

ミツシエルは、（いつ、嫌だ。死刑にはなりたくない！）といつて両手で頭を抱え、しゃがみこんだ。船長は困惑している。図書室の裏側で聞き耳をたてている佐藤と中居も顔を見合わせた。シナモンがあたりを見回したとき、壁の後ろに隠れている佐藤と中居をみつけた。

「ミツシエル様、犯行時間の直前、ある方からチップにしては高額すぎるお金とワインボトルを手渡され、『？將軍様？たちに差し入れて欲しい』と頼まれたのですね？」

シナモンの眼差しが優しくなったのとは反対に、船長の眼差しは陰しくなった。

「姫、君はかなり早い段階で黒幕が誰かを知っていたんだろう？」

「その人は、夢野様たちとは関わらない事件から、？將軍様？に恨みをもった人物です。悪人ではありません。むしろ、人間としては尊敬すべき人……」

シナモンは哀願するように、

「大佐、お願いです、厨房に入らせてください」

といったので、少し考えてから船長は了承した。それから二〇分ほどして、銀ポット、金縁のティーカップ、それにケーキケースをカートに乗せて、シナモンは図書室に戻ってきた。

第8章 アールグレイ

燻製茶の一種？アールグレイ？のアールは伯爵を意味する。一九世紀初頭、イギリスのグレイ伯チャールズ二世は中国を旅行中に、地元の老人から美味しいお茶のブレンド法を教えてもらい、製法が母国の紅茶メーカージャクソン社に伝わった。その後、中国茶をベースにしながらも、インド茶が加わり、ヨーロッパで栽培される柑橘類ベルガモットの香りが添えられて現在の形に至っている。

ミッシェルは船員用の部屋に戻された。ミッシェルではない別のスチュワートに付き添われて登場したのは老紳士エドガー博士であった。老紳士は読書室に入るなり、

「お茶の時間にはまだ間があるが、それもまた一興ですな」といって船長に向かい合う席に着いた。

テーブルの上には黄金の髪を後ろに結った貴婦人が用意した紅茶と茶請けがあった。シナモンは銀ポットから金縁のティーカップへ優雅な手つきで紅茶を注ぐと、それをエドガー博士に勧めた。湯気とともに甘酸っぱくてスモーキーな香りが、ふわっ、と漂いだしてきた。シナモンはいった。

「？アールグレイ？はイギリスと中国の友情の証しです。……イメージしてみてください、霞みたつ雲南の山里の中国庭園を。そこにテーブルを一つおいて、頭の薄くなった伯爵が、仙人のような中国の老人たちと歓談しながらお茶会を楽しんでいる風景を。なんと微笑ましいではありませんか」

エドガー博士は感慨深げに天井を仰ぎ、それからティーカップを

手にとった。

「それはあの不名誉な？アヘン戦争？の前のエピソードであろうか？ われらは中国人にあれだ酷いことをしたのだ。もう一度、ほんとうの意味で友人に帰れるのだろうか？」

「 戻れませんが、絶対に！」

シナモンは強く断言した。

老紳士はカップの紅茶をソーサーに移し冷ましてのんだ。ビクトリア朝時代の作法である。船長も同じ作法で紅茶を口にした。三人ともなかなか本題に切り出さず、話題は？アラビアのロレンス？になった。

時代は第一次世界大戦前のことだ。イギリスとトルコの関係が日増しに険悪になったため、正規ルートでの情報が入らなくなったイギリス諜報機関は、大英博物館に目を付け、中近東におけるスパイ活動を行わせた。表向きは古代遺跡の発掘調査、裏では地形測量を行わせていたのだ。シナイ半島の付け根で、当時トルコ領になっていた港湾都市アカバも、諜報活動の舞台となっており、英雄トーマス・エドワード・ロレンスもそこにいた。

ロレンスはストイックな男だ。菜食主義者で酒よりもむしろ水を好んだ。女性的な顔立ち、青灰色の瞳をしている。その人が、港から四〇〇メートル先のアカバ湾に浮かぶ小島を指さし、若き日のエドガー博士にささやいた。

「あの島に渡りたい」

ロレンスとエドガーは、

「島には中世の回教寺院があるので調査させてください」

とトルコ官憲の事務所に申請したが、怪しまれて断られた。当然のことだ。島からは港町が手に取るように望める位置にあったのだがロレンスはあきらめず、こんな作戦をエドガーにうち明けたのだった。

「市場で浴槽を買った。ボートになる。そいつで島まで渡ろう」
船をチャーターすれば怪しまれるが、浴槽ならば問題がない。二人は難なく浴槽ボートで月の夜に小島に渡った。浴槽ボートに積んでいたのは測量器材、それに写真機一式である。二人は必要なデータの大半を手に入れることができた。

後年、そのときの情報が生きて、アラブ軍を率いたロレンスがアカバ港を電撃的に攻略し、その名を歴史になさしめることになるのだ。

シナモンと船長はティーカップをテーブルに置いた。考古学者でもある麗人がいった。

「エドガー博士、あなたが中国にいた理由もそれですね？ 第一次世界大戦後、上海を拠点に発掘をする一方で、中国情勢を英国本国に伝えるという極秘任務を受けていた。調査対象は、日本軍」

老紳士はうなづき、

「そこは浙江省杭州市にある素晴らしい遺跡だった。いまはただの田園となっているが、水田の水に映えて島のようにそびえた丘こそが、その新石器時代遺跡だった。王宮、城壁、邸宅、道路、水田、茶畑……。文字と金属こそはないが長江文明ともいえるべき壮大な都城遺跡だった」

と目を細めていうエドガー博士は、どこか遠くをみているかのよ

うだった。

「……楽しい日々だった。イギリス人スタッフは有能だったし、中国人スタッフは協力的だった。けれども現地では次第に外国人排斥運動が起こってきた。そして？将軍様？と呼ばれるあの男が部隊を率いてやってきて、金目の出土品を略奪し、止めに入った私の仲間たちをピストルで射殺したのだ！」

黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人と顎髭の船長は、老紳士の拳が震えていることに気がついた。老紳士エドガー博士は続けた。

「当時の中国はいま以上に複雑だった。北京にあった中央政府は名ばかりで、各地には軍閥政権が割拠している状態だった。あの？将軍様？劉真栄は親日勢力に属していて、われらの目的に気づき踏み込んできたというわけだ。私は懇意にしていた中国人に手引きされ、間一髪で母国に帰還した……」

博士の口調がまた静かになった。

「……半年ほど前、奴が飛行船フライトの予約をいれたということ、ロンドンの諜報機関に勤務する仲間から知らされた。（奴は大量殺戮者だ。どうせ殺された仲間たちや、私のことなど忘れているだろう）……そう考えて殺害計画を練ったし、事実、上海の飛行場で顔をあわせたときも、奴は私に気づかなかった」

シナモンは目に涙を浮かべ、船長は何度も深くうなずいている。船長はいった。

「なるほど、それでああなたは仲間たちのために復讐を決意したのですね？」

質問には答えずエドガー博士は懐中からロケットペンダントを取り出して開き、画家になったという息子の写真をみつめ、涙を浮かべた。

「愛するわが子ユリセス……。この子のほんとうの父親は、事件のとき殺された仲間の一人で、帰国したとき孤児院から引き取って養子にした」

シナモンが急に立ち上がって博士の肩に両手をやった。

「はっ、博士　もしかして、この殺害計画は本来、ユリセス様が計画したものではないのですか？　あなたがご息を引き留め、代わりに実行したのではないのですか？」

老紳士は微笑むだけで何も答えなかった。

ややして落ち着いたシナモンは、博士にまた質問した。

「私を監視するという目的もあったのでしようが、あなたは野獣のようなあの男から私を守ってくださいました。感謝しています。…でも、どうしても判らないことが一つだけあります。博士、どうして私の捜査を手伝ってくださったのですか？」

老紳士は力無く笑った。

「まるで、ロレンスと仕事をしているようだった。楽しかったのですよ……」

船長がびっくりして立ち上がり、シナモンの顔色が変わった。

「博士、なにをおっしゃっているんです！　二人でお仕事をしましよ。遺跡を……」

椅子にもたれたエドガー博士の瞳から精細がみるみる失われ、急に首ががたと落ちた。

やさしい娘さんだね、シナモン。すでに？　カンタレラ？　をの

んでいる。……すべての責は私に　　自供を記した遺書はトランクの中だ……。

シナモンが抱きしめたとき、老紳士は静かに瞳を閉じた。顎髭の船長、それに読書室の後ろに控えていたいつもはにぎやかな佐藤と中居も、声を失って泣いた。

？カンタレラ？は豚の血を腐らせてつくる屍毒系の毒薬だ。ヨーロッパ中世において、イタリアのボルジア家は、この毒薬を使って政敵をつぎつぎと闇に葬り、一時はローマ法王まで輩出した。ボルジア家の秘毒？カンタレラ？は料理やワインによく馴染み、分量を変えることで殺害時間をも調節できたのだという。

アールヌーボーの豪華巨大飛行船シルフィーは、瀬戸内海から、大阪湾を抜けて伊勢湾上空を通過した。窓下にはいくつもの箱庭を並べたかのように表情を変えていく風景があった。瑠璃色をした海、小さく群れる島々、煉瓦造りの都市、藁葺き屋根の民家集落……。さらに飛行船は、そびえたつ富士山を左手に、駿河湾を右手にみて北上し南関東上空にきた。

横浜、川崎、品川……。軍艦や商船が停泊している港湾、緑に包まれた皇居……。

午後六時、東京芝浦に仮設空港に　シルフィー　は舞い降りた。

船体に収納されたいくつもの気囊から、しゅーしゅー、と水素ガ

スを放出し、ゆっくりと高度を下げたところで、乗員が専用窓から何十本ものロープを地上に投げ降ろすと、地上の係員が拾って繫留塔に素早くつないでいく。扉となっているタラップが開いてハの字となり、四基のプロペラエンジンは回転を停止した。しばらくして出迎えの楽隊の演奏に誘われるように乗客たちがつぎつぎと降りていった。

下部デッキに最後まで残っていたのは、シナモンに佐藤と中居、三人を見送る船長だった。船長が顎髭をなでながら佐藤と中居にきいた。

「殺人事件のことは記事に書くのかい？」

佐藤は首を横に振った。

「豪華飛行船シルフィーのフライト日誌を書いただけでも特ダネです。……あとは何もみてませんよ　なあ、中居」

「そうです。先輩が書くへっぽこ記事なんぞよりも、俺が撮ったシルフィーのオールヌーボー内装だけで日本中がぶったまげますよ」

「死ね！」

佐藤は中居にげんこつをくれてやった。

船長はシナモンに、

「ところで姫、どうしてあの男女二人組ではなく、博士が真犯人だということがわかったのだね？」

ときくと、その人は、

「考古学には層位学が借用されておりますのよ。例えば、つくられた当時、四角形をしたAという穴があり、石器時代のBという本来まるい穴を壊し、重なり合っているとします。調査の過程で掘り下げていくと、穴Aは完全な四角となりますが、穴Bは完全ではない壊れた形でできます。捜査は経過の復元。新しい出来事から順に整理していくのが近道なのです」

と答え、具体的な根拠をあげていった。

第一に、ワインボトルを一度開封して毒を混入し、ふたたび新しいコルク栓でふさぎ、注ぎ口をアルミ膜で包装し直すという復元技術は高度な技術を要するという問題がある。材料や時間の問題があるから船内でやっている暇はない。そこで船内にはストックのなかったブルミエ区画のシャブリを持ち込んだ犯人は、器用で趣味がよい、ということになる。

第二に、毒物の問題がある。ワインが砒素の解毒剤であることを知り、口を含むだけでひどい刺激のある青酸カリを避け、中世イタリアの屍毒 カンタレラ を採用していることから、犯人は、薬学はもちろん中世ヨーロッパ史に精通していなくてはならない。

第三に、犯行時刻の問題がある。犯人は午後四時から七時の間に被害者たちを殺害している。

「信じたくはなかったのですが、いま示しました条件に該当した人物はエドガー博士お一人しかいらっしやなくて……。決め手は犯行時間でした。私が夢野様と紅様お二人の、『計画を変更しなくては』という声をきいた直後、食堂で博士と私はお会いしたのです。お二人がチーズに砒素を盛って失敗した直後に、スチュワートのミッシェルさんに？カンタレラ？入りのワインボトルをお渡しできたということですよ」

シナモンの説明に船長は、ひゅーっ、と口笛をふいて、

なるほど、チーズに盛られた毒とワインに盛られた毒か。

とつぶやいた。空港には、リザード家の家宰スイーツマン・ウル

フレザーが手配した出迎えのリムジンが待機している。黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人が車に乗ろうとしたとき、もう一度シルフィーに戻って、S字紋の意匠が施されたタラップの欄干に頬を寄せて、

またお会いしましょう、私のシルフィー。

と語りかけた。そして、階段の上にいる下部デッキの三人にむかい、スカートの両端を軽くつまむと一礼したのだった。姫君のリムジンが空港から東京のいずこかへと消えていくのを、下部デッキにいた三人はみえなくなるまで手を振った。

やがて、佐藤と中居も下船した。

「ぜつたい、俺よりやべーって先輩。これ貸しますよ」

中居は佐藤にハンカチを渡した。

「中居、おまえなーっ！」

「余計でしたか？」

「いや、上出来だ」

佐藤は中居がよこしたハンカチで目頭をぬぐった。

最後に残った船長は一度地上に降りて、うまそうに煙草を一服してから、

やれやれ、後片づけしなくては……。

とつぶやき、また飛行船のタラップを上っていったのだった。

黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人と、出迎えにきた家宰を乗せ

たりムージンが、空港を後にしようとしたとき、家宰がなにげなく車窓から飛行船の繫留塔を見上げた。塔の頂には二人の若者の姿がある。そう、東京に向かう列車の旅ですつと一緒にだった若者たちだ。

スコルツェニー君か？

家宰の言葉に驚いて、シナモンも外をみると、繫留塔には確かに二人がいてこちらを見下ろしている。距離があるので顔ははっきりとは判らない。しかし常人にはない 気 を放っており、スコルツェニーその人であることを知るのには容易であった。

「ウルフレザー家宰、スコルツェニーたちを知っているの？」
シナモンもまた、その若者を知っているようであった。

繫留塔最上部の欄干にはもたれかかる例の二人がいた。

「スコルツェニー、君のいうとおりだったね。ボオルジア家の毒薬の調査を記した カンタレラの書 はヴァチカンで保管されていた。ボルジア家の総帥ロマーニャ公爵チェザーレは、元枢機卿で、父親は教皇アレクサンデル6世……ヴァチカンに カンタレラの書 があるのは、考えてみれば当然のことだった……」

ミューラーは頬に傷のある友人を誇らしげにみやって続けた。

「……それにしても劉真栄將軍は馬鹿だったね。上海の親日政権から、国民党の蒋介石に寝返ろうとしていた。そして日本陸軍ばかりかわれらの動向まで探ろうとまでしていた。ハウスホーファー教授のおっしゃっていた通りだった。教授を通して、あの方が暗殺を指示なされるのは必定といえるね……」

「……」

「スコルツェニー、えっ、泣いているの？」

「ミューラー、僕が泣くのは意外かい？ 尊敬していたんだ、エド

ガー博士のことをね。任務でなければ、博士が望むままに カンタ
レラの書 を渡したりはしなかった……」

このとき、繫留塔から離れた下のところから係員の声がした。

「こらーっ、誰だ、勝手に登っているのは。……おりてきなさい」

係員が憤然として繫留塔のてっぺんに登ってみると、二人の姿はなく、かわりに、百合の花束がそこに置かれているのをみつけた。

どうなってんだ、いつたい。

係員は首を何度もかしげて花束に手を伸ばすのだった。

(稿了)

ここは東京に本社がある雑誌『東京倶楽部』の編集室です。編集長の机の手前には記者やカメラマンの机が並べであり、並んで座っているのが、記者の佐藤氏とカメラマンの中居氏でありました。ちょうど昼休みで、二人はコンビニで買ってきたカップラーメンをすすりながらノートパソコンのキーボードをたたいているところです。

「終わったぜ、なにもかもがよ。真っ白な灰に……」

「やだなあ、先輩。すっかり廃人になっちゃって」

そういいながら、中居氏はパソコンを開きました。するとそこには、

「ご無沙汰しています、みなさま。シナモンです。第2部「コンウォールの才媛」が始まります。私のティーパーティーにはぜひいらしてくださいね。それではスコーンを焼いてお待ちしております。」

シナ

モンより

と書いてありました。

「すげーっ、先輩、すげーすっよ」

「姫様からメールきてますよ」

「なにーっ!」

佐藤氏は身を乗り出して、ニコツとタウンのスウィーツマン・ブログを開いてみました。すると、そこには、レディー・シナモンがいうように、伯爵令嬢シナモン第2部「コンウォールの才媛」が表示されているではありませんか……。

「中居ーっ！」

「余計でしたか？」

「いや、上出来だ！」

画面をながめる中居氏はやや冷めた口調でいいました。

「しかし先輩、作者のスウィーツマンって、いつも見切り発車ですよ。ねえ。ちゃんと完成させてから掲載するのが常識というもんでしょ」

「そっ、そんな、業界のタブーを」

佐藤氏は慌てて中居氏の口を塞いだところで、はっ、と何か重要なことを思い出したようです。

「そ、そうだ、中居。俺たち、営業しなくては……」

佐藤氏と中居氏は、起立すると、パソコン画面に向かって名刺を差し込みました。

「私どもは、雑誌『東京倶楽部』の佐藤と中居です。『伯爵令嬢シナモン』シリーズの主要登場人物にもなっており、当ブログサイトの営業担当をさせていただいております。よろしくお願いいたします」

一同、礼。

雑誌『東京倶楽部』の非重要なお知らせ VOL.2 (後書き)

ひきつづき、第2部もお楽しみくださいませ。

待ちきれない方はこちらをごらんください。

FC2『伯爵令嬢シナモン』「飛行船の殺人」

<http://r24eaonh.blogspot.fc>

2.com/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5678j/>

伯爵令嬢シナモン 第1部 「飛行船の殺人」

2010年10月9日17時51分発行